

謝辞

第二稿を上梓するに当たって、日本モーム協会会長の行方昭夫先生にお礼申し上げます。

今度のモーム協会の例会（二〇一八年六月二四日）の作品鑑賞に行方先生の翻訳された『働き手』（原文は『わが家の稼ぎ手』と同じ *The Breadwinner*）が取り上げられることになったので、先生の翻訳を拝読し拙訳と比べてみたのですが、思った通り、何ヶ所もの誤訳が見つかりました。そこで、その部分を訂正し、ついでに文体にも少し手を加えたのがこの第二稿です。

W・サマセット・モーム 作

わが家の稼ぎ手

喜劇一幕三場

宮川 誠 訳

W・S・モーム 作 宮川 誠 訳

『わが家の稼ぎ手』 喜劇 一幕三場

登場人物

チャールズ（チャリー）・バトル

マージェリー（マージ）……チャールズの妻

ジュディー……………チャールズの娘

パトリック（パット）……チャールズの息子

アルフレッド・グレインジャー

ドロシー……………アルフレッドの妻

ダイアナ……………アルフレッドの娘

ティモシー（ティム）……アルフレッドの息子

舞台はゴールドズグリーンにあるバトル家の居間。物語の展開に途切れはないが、観客に休息を取ってもらうため、幕が二度下りる。

第一場

陽当たり、風通し、共に良さそうな、上品な家具の備え付けられた居間。現代的だが、過渡に現代的というのではない。窓からは郊外の住宅にふさわしい、美しい庭が見える。

幕が上がると、ジュディーとパトリックの姿がある。パトリックはフラノのテニスウェア姿。眉目秀麗な十八歳の若者。ソファアに気持よさそうに横たわって、スポーツ新聞を読んでい
る。床には似たような新聞が散らかっている。ジュディーは十七歳。金髪で、可愛らしく、
冷静。兄同様テニスウェア姿。蓄音機の前に立っていて、ちょうど新しいレコードをかけた
ところ。パトリックとジュディーの会話は、どんなに乱暴な言葉が使われ、どんなに率直に
自分の考えが述べられようとも、決して厭味にはならず、愛嬌のある楽しいものだ。同じこ
とは二人の友人、ダイアナとティモシーにも当てはまる。

パトリック（新聞を見たまま）また、それ？

ジュディー 兄さん、これ、まだ出たばかりかしよ。先週出来上がって、昨日発売。

パトリック まさか。僕はそれを子守歌にして育ったんだ。ミルクを飲むとき静かにしてるようにっ

て、おふくろがいつもかけてたよ。よく憶えてる。

ジュディー 嘘ばっかし。この曲、ダンスに最高。さあ、一緒に踊ろう。

パトリック (体を動かさず) 遠慮しとく。

ジュディー このオ、ものぐさなんだから！

パトリック タイムとダイアナ遅いな。

ジュディー いま何時？ ダイアナはお昼食べたらずぐ来るって言ってたけど。

パトリック 電話して、早く来いって言えよ。

ジュディー (愛想良く) 自分でしたら？

パトリック 可愛くないんだよな。

ジュディー 結局タイムは来学期、学校に戻るんだよね？ 兄さんと一緒にケンブリッジに行きたい

って言うってたけど、もう一年待った方が良^いってお父さんに言われたみたい。

パトリック あいつはまだ十七だからな。

ジュディー 十二月には十八になるよ。

パトリック いま十八ってことと十二月に十八になるってことは全然違うさ。そのくらい、どんなオ

ツムの弱い人間にだって解ると思うけど。

ジュディー さあ、来た。(彼女はドアのところへ行き、それを開ける。) やっと来た。

ダイアナ (ドアの外で) こんにちは！

ジュディー こっちよ！ ラケットも持ってきて！

ダイアナ オーライ。

ダイアナが入ってくる。十八になったばかりで、髪は黒、美しい目元、輝く肌をしている。

手にはラケット。続いて弟のティモシーが入ってくる。ダイアナより一歳年下。先程の会話

から判るように、この十二月に十八になる。髪は黒。背が高く、ほっそりしている。テニス

ウェアの上に明るい色のブレザーを着て、首にはタオルを掛け、ラケットを二つ持っている。

パトリックがソファから起き上がる。

パトリック ハイ！

ダイアナ ハーイ！

パトリック 忘れちゃったんだけど、キスはするんだっけ？

ダイアナ キスしていいのは、ダンスパーティーでワインを飲んだ時だけ。

パトリック ハイ、タイム。どうだい、最近調子は？

ティモシー 順調順調。君は？

パトリック (ティモシーの持つラケットを指さして) なんで二つも？

ティモシー 最近ちよつと腕が上がってね。上手い奴は二つ持つことになってるのさ。

パトリック ウインブルドンってわけだ。

ダイアナ ほんと、上手になったんだよ。

パトリック ケンブリッジへ行くの、もう一年待つんだって？

テイモシー 参っちゃうよ。親父ときたら、まったく分かってないんだから。

パトリック で、その尊敬すべき親父さんは、どう最近は？ 相変わらずかい？

テイモシー 相変わらず剽軽さ。

ダイアナ 自分を面白い人間だと思ってる人が家にいると、疲れるんだよね。

パトリック 有難いことに、我家はその心配はないな。こっちが冗談言ってるってことを親父に解ら

せるには、斧か何かでぶっ叩くしかない。

ジュディー 父さんにはまるでユーモアのセンスがないんだよね、かわいそうだけど。

テイモシー これでもかって酒を飲ませたら？

パトリック 効果なし。生まれつきあんなだよ。

ダイアナ パット、いつ帰ってきたの？

パトリック 昼飯のちよつと前。

テイモシー 一昨日から休暇に入ったんだ。

ダイアナ 高校終えて、嬉しい？

パトリック 勿。そりゃ高校生活も悪くなかったけど、今は早くケンブリッジへ行きたくてしょうが

ない。きつと愉快的経験ができると思うね。

ジュディー ねえ、ダイアナ、春に会った時と比べて、兄さん大きくなったと思わない？

パトリック 大きくなったさ。ジャケットを着てみりや自分でも判る。明日、何着か新しいスーツを

注文するつもりなんだ。

テイモシー 何処で作る？

パトリック まだ決めてない。親父は例によって行き付けの店で作らせたがるんだろうけど、正直、

あそこの服はいかにもおじん臭くて。勘弁してほしいって言うつもりだ。親父ならあの店で充分

なんだろうけど。

ダイアナ 帽子が邪魔だね。(彼女は帽子を脱つて、短くカットされた髪を振る。) ティム、櫛貸し

て。

テイモシー (ポケットを探つて) あれ、家に置いてきちゃったみたいだ。

ジュディー 兄さんが持つてるよ。

パトリック (ポケットから櫛を取り出して) はいよ。

彼はそれをダイアナに渡す。ダイアナはハンドバッグから手鏡を取り出して、髪を梳かす。
次にジュディーがその櫛を取り、自分の髪を梳かす。

テイモシー パット、君は今でも法廷弁護士になるつもり？

パトリック ああ、そのつもりさ。なんだって、成功のチャンスがありそうな仕事といたら法曹界

くらいのもんだからな。毎日ロンドンで食事つても、なかなか乙じやないか。

テイモシー (ジュディーに) ちよつと貸して。

彼はジュディーから櫛を受け取り、すでに充分すぎるほど整えられた髪を梳かすと、それをパトリックに渡す。パトリックも当然のことに髪を梳かし、それをポケットに戻す。

パトリック で、暫くしたら政界入りするつもりさ。

ダイアナ どっち側？

パトリック まだはっきり決めちゃいない。親父はずっと自由党だけど、自由党はどうも将来性がなさそうだから、労働党しかないんじゃないかって、今んとこはそう考えてる。

ダイアナ あたしは労働党。ずっと労働党支持。

パトリック 今の労働党には僕らみたいな人間が必要なさ。名門高校、名門大学、まあ、その他諸々の経験を持った人間がね。

テイモシー 君は運がいいよ。何でも好きなことができる。僕は親父のしょうもない仕事を継がなくちゃならない。

ダイアナ 父さんは責められないよ。だって先祖代々続いてきた仕事なんだから、一人息子に跡を継がせたいと思っただって当然でしょ？

テイモシー 僕が信頼できる事務弁護士に見えるか？

パトリック 見える、見える。完璧だね。僕に山のような書類を手渡す姿が目につかぶよ。

テイモシー 一つ決めたことがあるんだ。僕は自分の家には住まない。

パトリック 親だっで一一緒に住んでくれるとは期待してないさ。休暇に他に行くところが無くなった

ら、その時だけ帰ってきてやりやいいんだよ。僕もロンドンに住むことになったらすぐ親父を説得してマンションを借りるつもりだ。

テイモシー どう？——僕と一緒にするのは。

パトリック 悪くないね。個人的にはアルビートル通りが気に入ってるんだが。

テイモシー いいよ。ロンドンの中心でありさえすりや、どこでもかまわない。

パトリック アルビートル通りは、そりや良い所さ。あそこしかないだろう。

テイモシー じゃ、それで決まりだ。

ダイアナ あたし、田舎の生活にはうんざり。

パトリック 同感だね。

ジュディー こんな荒野みたいな、何にもないところになぜ住みたがるのか、理解に苦しむよね。

パトリック おふくろは素晴らしい環境だっと思って考えてるんだから。かわいそうに。

ジュディー たしかに、あたしたちが小っちゃかったうちはここで良かったんだろうけど、——新鮮な空気とか何とか。でも、もう大人になったんだから、こんなとこ、住む価値ない。

ダイアナ ねえ、信じられる？——母さんはここは中心地だっと思って考えてるんだよ。あたしが、こんなとこ地の果てだっって言ったら、「何言ってるの。ピカデリーサーカスから地下鉄でたったの十二分でしょ」だっ。

パトリック 親ってのは困ったもんだ。我家の親なんか、僕らがもう大人だっことに気がついてさ

えない。

ジュディー 母さんったら、あたしが着る服を今でも自分で選びたがるんだよ。このあいだなんか、

月々のお小遣いに洋服代を追加してほいって、大喧嘩した。最後には渋々承知してくれたけど。

テイモシー その点じゃ我家の親父はありがたいよな。十五の時からちゃんと小遣いをくれる。

パトリック 金の件じゃ、親父と一悶着あるだろうな。ケンブリッジに入ったら、年五百ポンド欲しいって言うつもりだから。

テイモシー そんなにくれるかな？

パトリック ま、無理だろう。でも四百はくれると思う。最初に四百って言えば、三百五十にしようとするだろ？

テイモシー こつちが五百って言ったら、それに文句を言うべきじゃないのにな。

パトリック 金の件だけじゃなく、何に対しても文句を言うべきじゃないのさ。なにも、生んでくださいってこつちから頼んだわけじゃない、向こうさんのお楽しみのお結果生まれちゃったに過ぎないんだから。それに、子供を育てるっていう楽しみを与えてやったんだ。そのことに報いるべきだと思うね。

テイモシー まったく。それがフェアってもんだ。

パトリック 大学を出てロンドンに落ち着いたら、今度こそ最低でも五百は寄越すべきだ。弁護士稼業ってのは、三十前じゃ、なかなか金にならないからな。

テイモシー 僕も親父から年五百ポンドせしめられるかな。そうなりや二人でロンドンを満喫できる。

ダイアナ 二人の話を聞いてると羨ましくなっちゃう。いいよねー、ロンドンでマンション生活なんて。あたしもロンドンにマンションが欲しい。ジュディー、あなたもでしょ？

ジュディー うん、当然。

ダイアナ 田舎はもううんざり。

パトリック 結婚すればいいじゃん。

ダイアナ まだ五、六年はその気なし。二十四になったらしたいと思ってる。その前に大いに楽しまなくっちゃ。

ジュディー それじゃ遅くない？ あたしは二十一で結婚したい。

パトリック 親父さんに、マンションが欲しいって言って見たら？

ダイアナ 我家の父さんがどんなか知ってるでしょ？（父親を真似て）私は子供たちのために素晴らしい家庭を築いてるんだ。なあ、自慢に聞こえるといけないからここだけの話だが、あの悪ガキどももこれほどの家庭はそうざらにはないと思っとるよ。

パトリック （ちよつと笑って）かわいそうに、全然分かってない。

ダイアナ あたしたちのためだと思ってる。根は善い人なんだけどね。

テイモシー ただし愛情過多なんだよな。

ダイアナ 時々哀れを感じちゃう。自分の子供とは友達のように付き合うべきだって、変に思い込んでるんだもん。

テイモシー 照れくさいよ、親父から友達みたいに話しかけられたんじゃ。

ダイアナ でも、好いこともあるのよ。父さんと友達みたいに付き合っていると、こっちの欲しい物は大抵何でも買ってくれるし。

パトリック しかし、いつもいつも親のご機嫌を取ってなくちゃならないのは屈辱だ。

ダイアナ けど他に仕様がある？ あの人たちの頭の中には、自分の子供はこういう人間だって固定観念があるんだから、それに合わせるしかないじゃない。本当は考えてるのは全く違う人間だなんて、全然理解できないんだよ。

ティモシー 中学卒業の頃、おふくろが親父に何て言ったと思う？ 「あなた、そろそろティムに性のことを教えておくべきじゃない？」

パトリック やれやれ。

ティモシー あの時の親父、まったく見物だったよ。愛情溢れる父親の役を精一杯演じて、早口で捲きたてるんだ。七面鳥みたいに真っ赤になって、汗をポタポタかいてた。

パトリック で、君はどうしたんだ？

ティモシー 何ができるっていうのさ？ まさか、「父さん、三年遅れてますよ、父さんの言おうとすることで僕の知らないことはほとんどありません」なんて言えないだろう？

ダイアナ ティモシー、純情。可愛い。

ティモシー だから、僕はちよっと顔を赧らめて、無知な少年の役を演じたってわけ、親父には言いたいことを言わせてね。親父は最後に一ポンド寄越して、「さあ、姉さんをコンサートに連れてってやれ」だって。笑っちゃうだろう？

パトリック ジュディー、我が家の尊敬すべき父上は、この頃どう？

ジュディー さあ、いつもと**おん**なじじゃない？

ダイアナ まだ会ってないんでしょ？

パトリック うん。まあ、そのうち帰ってくるさ。車が欲しいって言ったら買ってくれるかなって思っ
って訊いてみたんだ。

ティモシー 車？ そりゃ凄い。

パトリック もう大学生になるんだ。自分の車くらい持って当然だろう。いつもいつも親父のを借りるんじゃないよ。(ジュディーに) 車のこと、おふくろに言ってくれた？

ジュディー 株式市場の様子次第だろうって。

パトリック 株は好調だ。この世にアホな連中がいる限り、株屋は儲かることになってる。

ダイアナ ねえ、あなたのお父さんって好い人だと思うけど。

ジュディー 退屈な人間だよ。

ダイアナ 剽軽者より退屈な方が好いんじゃない？——父親としては。

パトリック 有難いことに、顔を合わせるのは晩飯の時くらいなもんだけど、でも、その晩飯の時間が最悪なんだよな。なあ、ジュディー？

ジュディー 最悪なんてもんじゃない。

パトリック 椅子に座ったきり、一っ言も喋らないんだ。おふくろは、やれ文学だ、やれ美術だって、僕らを啓発しようってんで、ペチャクチャ喋りっぱなしだし。

ダイアナ それが普通の家庭なんじゃない？

パトリック 少なくとも僕はうんざりだ。僕らもあの年齢になるとあんな退屈な人間になるのかな。

ジュデュー あたしたちはそんなことないと思うけど。

テイモシー 親父さん何歳？

パトリック 確か、四十二、…だったよな、ジュデュー？

ジュデュー うん。わりと若いとき結婚したから。二十三だったかな。

ダイアナ 例の戦争花嫁ってやつだね。気の毒に。確か我家の親もそう。

ジュデュー そんなはずないって。もっと前に結婚してたはずだよ。だって、兄さんもう十八だもん。

ダイアナ 戦争が終わって何年だった？

テイモシー 戦争の話なんて止せよ、飽き飽きだ。

ジュデュー ホント、戦争を経験した人って退屈な人ばかりかし。

パトリック まったく。

ジュデュー 集まるとすぐ戦争の思い出話。あたし、叫びたくなる。

ダイアナ わかる、わかる。まるで誰でも関心持つてみたいに。

テイモシー わびしい世代なんだよな。

ダイアナ でも、もし戦争がなかったら、今ああいう人たちがもっと沢山いたってことだよな？

テイモシー 要するに、もうどうでもいい連中なんだ。連中の役目は終わったってこと。

ダイアナ 残念ながら、それに気がついてない人もいるけど。

ジュデュー じゃあ、これからは、機会があったら必ず言つてやることにしない？

パトリック 結局、人間四十過ぎたら何の役にも立たないってこと。邪魔になるだけだ。連中だった

人生面白いはずがない。

ダイアナ そうだよな、あたしもそう思う。でも、だからって、どうするの？ まさか犬の仔みたい

に川に捨てるわけにもいかないし。

テイモシー とにかく、最近、人間長生きのし過ぎ。

パトリック 自然の法則が旨く出来れば、人間、四十になったら静かに消えてくんだけだな。

ダイアナ それって、大人は嫌がるんじゃない？

パトリック どうして？ 連中の一番良い時は終わったんだ。もう、やれることはやり尽くしただろ

う？ 画家や詩人を見てみる、四十過ぎてから真面目な作品を残した奴がいるか？ どうしてこの

世にしがみついているくちやならないんだ？ 僕や、君や、僕らの世代にとっちゃ、重荷に過ぎ

ないじゃないか。静かにあの世に行ってくれるのが一番なんだ。卵を産んだら死んでく蟬蛻みた

いにさ。

ジュデュー 自分が四十まで生きるなんて考えられない。三十六だって想像できない。あたし、二十

九で死ぬことにしてるんだ。

ダイアナ もう遺書は書いた？

ジュデュー ううん。でも、書こうかなって思ってる。

テイモシー あの翡翠のボタンだけど、あれは僕に残してくれない？ カフスにしたら恰好いと思

うんだ。

ジュデュー 残念でした。宝石とかは、あたしと一緒に埋めてもらう。それはもう何年も前に決めました。

パトリック くだらない話はなし。僕は真面目なんだ。なかには国民が或る年齢に達したら安楽死させる国だってあるそうじゃないか、統制が取れてるんだよな。

ダイアナ 例外はなし？

パトリック 勿論。

ダイアナ けど、自分の親の場合はかなり辛いんじゃない？

パトリック 辛いだろうな。しかし、公共の利益のためには、個人的感情は犠牲にしておくやならない時だつてある。例えば、僕らの場合だけど、僕もジュデューも親父おふくろをととても愛してる。だろ？

ジュデュー うん、誰にも負けないくらいね。

パトリック 愛してはいるが、しかし親父にもおふくろにも欠点があるつてことに盲なわけじゃアない。おふくろは芸術大好き人間で、気取り屋だ。親父は、かわいそうに、ユーモアのセンスがまるで無い。

ジュデュー まるでね。

パトリック 二人が僕らに良くしてくれたことは確かだ。良い学校へ行かせてくれたし、休暇にはいろんなどころへ連れてつてくれた。で、僕らも親父おふくろに対して良い子だった。面倒をかけ

たことなんて一遍もない。自慢の子供だったんじゃないかな。

ダイアナ でしょうね。

パトリック しかし、二人の役目が終わったつてことも確かだ。これからは邪魔にしかならないだろう。もう僕らは大人なんだ。自由にやりたいんだ。

ティモシー そう。まさに、そのとおり。

パトリック だろ？ 僕は思いつきで言ってるわけじゃない。このことについてはじっくり考えてきたんだ。口から出任せじゃアない。僕らはもう自分の意思で行動すべき年齢に達した。全てが僕らの前にあつて、全てが僕らの登場を待っている。僕らはもう親に……何て言うか……

ダイアナ ああしろ、こうしろつて言われたくない。

ジュデュー 拘束されるのはまっぴら。

パトリック 羈絆、そう、家族という羈絆に縛られるべきじゃない。

ティモシー 親がやりたいようにやるつてのは不公平だよな。

パトリック 不公平なんてもんじゃない。不条理だ。不条理。まさにそれだ。連中は若い頃やりたいようにやってきた。なのに、今になって、僕らがやりたいようにやろうとすると、それを邪魔しにかかる。……結局は金の問題かな。金がなくちゃやりたいことがやれない。若い時にこそ金は必要なんだ。年寄りが金を持つてたつて何になる。

ダイアナ 確かにあの人たち、馬鹿みたいなことにお金を使つてるよね。それは確か。

パトリック 親父も長年株屋をやつてるんだから、もう結構貯めたはずなんだ。その金をどうして今

僕らが使っちゃいけないんだ。歳を喰ってから使ったって何の意味もないじゃないか。こりや不条理だよ。

ダイアナ そのとおりだとは思うけど、でも、殺しちゃうってというのは、ちよつと過激すぎない？
かわいそう。

ジュデュー 兄さんにはそんなことできつくないと思うけど？

パトリック 確かに、いざとなったら躊躇するだろうな、人間には感情つてもものがあるから。よぼよぼの犬を苦しみから解放してやる時だつて、いい気持はしない。

ジュデュー その話は止めて。ボンゾーが獣医さんの所へ連れてかれた時、あたし、涙が止まんなかった。

パトリック 僕はちよつと気分が悪くなっただけさ、こう言っちゃ何だけど。

ジュデュー あんなに可愛い犬はいなかったよ。

パトリック わざと残酷になりたいわけじゃないんだ。ただ、統制の取れた国では、国民が自分の務めを果たし終わったら——そう、例えば四十になったら——その悲惨さから救ってやるべきなんだ。でも、僕らは統制の取れた国に住んでるわけじゃないし……まあ、この国がそうなることは有り得ないだろうな。

ティモシー そりゃ判らないさ。まだ僕らの世代が政治の要職に就いてるわけじゃないし。

パトリック 僕としては、喜んで妥協するつもりだ。

ダイアナ 妥協って？

パトリック つまり、四十になったら親には田舎へ引っ込んでもらつて、全財産を子供に譲るようにさせるってこと。財産がない連中はもちろん国が面倒見るが、財産がある者は子供から生活費を貰うことになる。

ティモシー いいねエ。

パトリック ジュデューと僕は親父とおふくろに年二百五十ポンドやることにする。それだけありや充分だろう。田舎に小っちゃな家を持つて、おふくろは鶏を飼えばいいし、親父は庭仕事をすればいい。幸せだと思うよ。

ジュデュー そういう暮らしがしたいつて、母さんいつも言ってる。

ダイアナ 二百五十ポンドで足りる？

パトリック 充分さ。野菜は庭で作れるし、卵は鶏が産んでくれる。

ジュデュー あたしたち、きつと楽しい生活ができるね。

ダイアナ どんなことしたい？

パトリック まずこの家を売つて、ロンドンにマンションを借りて、そこでジュデューが結婚するまで一緒に暮らす。

ジュデュー あたしは、……ロンドンにあるナイトクラブ全部の会員になる。

パトリック 狩りもしたいな。僕が打つて出る選挙区はどこかに狩猟用の小屋くらい持てるだろう。

そうすりゃ一石二鳥だ。

ティモシー 僕はとびつきりスピードの出る自動車を作らせる。自家用飛行機もいいな。

ダイアナ あたしは何をしようかな？ もちろん、ドレスはバリで作らせることにするけど……。
ジュディー 楽しくなりそう。

パトリック 間違いないく、これまでのどんな世界より好い世界になるさ。年寄り連中の方が僕らよりもが分かってるって？——どうしてそんなことが言えるんだ。連中は過去の遺物なんだ。僕らが未来だ。未来は僕らのものだ。僕らの金で僕らのやりたいことをやる。それが一番なんだ。

ダイアナ パット、このまえ帰ってきた時と比べると、随分進歩したじゃない。

パトリック 三ヶ月つてのは結構な時間さ。僕はいろんなことをじつくり考えたんだ。

テイモシー 僕も君みたいに話が上手くて説得力があったらな。

パトリック 君には必要ないさ。事務弁護士の仕事は書類を整理すること。僕みたいに実 법정に立つ弁護士には、こうした能力は欠かせないがね。

ジュディー 母さんだ。

パトリック じゃ、そろそろテニスを始めるか。

テイモシー よっしゃ。

ジュディー 誰と誰が組む？

四人は立ち上がる。テイモシーは自分のラケットを持つ。そこでドアが開き、マージェリーとドロシーが入ってくる。マージェリーは小柄で可愛らしく、髪は幾分くすんだブロンド。

ドロシーは娘のダイアナ同様黒髪で、蠱惑的な女性。その気取った態度は抑圧された情熱の

裏返しである。二人とも未だ四十にはなっていない。洒落た服装で、化粧も充分にしている。子供たちのこれまでの会話から想像されたような老いぼれでは全くない。当の二人も、自分たちが老けているなどは少しも思っていない。

マージェリー みんな、怠け者ね。テニスでもしたら？

ジュディー そうしようと思ってたところ。

パトリック こんにちは、ドロシー叔母さん。

ドロシー パット、大きくなったわね。

マージェリー そう思うでしょ？

ドロシーはパトリックの頬にキスをする。

ドロシー (悪戯っぽく) こんな立派な青年にキスしたなんて判ったら、アルフレッド気を悪くしないかしら？

パトリック でも、叔母さんは僕の親戚ですから。

ドロシー 厳密には叔母じゃないわ。お母さんとわたしは従姉妹に過ぎないのよ。

ダイアナ ドロシーが言いたいのは、父さんがいなかったら、あなたと結婚できるってこと。

ドロシー ダイアナ、また莫迦なことを

ティモシー でも、悪くない考えだな。パット、もし親父が車に轢かれたら、君をドロシーと結婚させることにする。きつと僕の好い父親になるだろうよ。

パトリック そうなったら、パットなんて呼ばせないぜ。ちゃんとお父さんって呼ばせるからな。

マージェリー さあさあ、莫迦なこと言っていないで、早くテニスに行きなさい。わたしたちは話があるの。

ティモシー はいはい。じゃア行きますか。

パトリック (ドアに向かいながら) やれやれ、帰ったばかりで疲れてるつのに、まったく。少しは休ませてくれよ。

四人は出てゆく。マージェリーとドロシーは、ソファアに腰掛け、手鏡と口紅を取り出して、口紅を塗りながらゴシップを始める。

ドロシー パットったら、大きくなったこと。それに、とってもハンサム。あなた、気を付けないと。女がどんなものか、分かっているでしょ？

マージェリー あら、心配ないわ。あの子は純情そのものだもの。何でもわたしに話してくれるのよ。

ドロシー そうね。この頃、若い人について色々だらないことが言われるけど、わたしたちの若い頃に比べたら、半分も分かつちやいないわよね。

マージェリー こんなに早く大人にならなくてもいいのに。今日パットが学校から戻った時、シヨツ

クだった。

ドロシー わたしは気にしない。戦争前とは違うのよ。わたしたち、戦前の人みたいに早く老け込むってことはないもの。ダイアナと一緒に買い物に行くと、いつも、お姉さんですかって訊かれるのよ。

マージェリー お世辞じゃなくて、あなたはダイアナと同じ年みたいに見える。でも、それは髪が黒だから。その点黒髪はいいわ。わたしは金髪でしょ、金髪はくすんでるのが早いものよ。

ドロシー そんなことないわ。昨夜食事しながら、あなたの髪、なんて素敵なんだろうって見とれたのよ。

マージェリー でも昔に比べたら、随分くすんできたわ。ちょっとだけ手を入れてもらおうかしらって思ってるんだけど……、でも判っちゃうかしら。

ドロシー 判るでしょうね。表情がきつく見えるもの。
マージェリー 染めるのとは違うのよ。ほんの数滴……。アーネストのお店でやってくれるって言うの。誰にも気づかれませんが、ごく自然に見えますって。

ドロシー でも、今のままのあなたが好きだって言ってくれる人がいるじゃない、違う？ わたし知ってるわ。

マージェリー あなたったら！ 何のこと？ ちつとも分からない。

ドロシー マージ、誤魔化さなくなっちゃったいいのよ。この目は節穴だと思ってる？ ねえ、昨夜は見え見えだった。

マージェリー まさか、そんなこと。……ホントに？

ドロシー わたしには見え見えだった。あの人が何を言ったのか、知りたくてしようがなかったの。ねえ、教えてよ。

マージェリー あの子たち、本当にテニスしてる？

ドロシー 大丈夫、間違いないから。さあ早く、マージ、早く話して。わたしドキドキしちゃう。

マージェリー 彼、わたしに夢中だって言うの。ずっと言いたくてしようがなかったんだけど、チャーリーとは仕事の関係で顔見知りだし、そのほか何だかんだあって、これまで言い出せなかった、でも、もうどうしようもないんだって。

ドロシー それって、夕食の最中？ 後？

マージェリー 食事の最中。でも、その時は軽い調子だった。真剣になったのはダンスをした時。

ドロシー 彼、ダンスは上手？

マージェリー ええ、とつても。

ドロシー 彼、あなたがその言葉をどんな風に受け取ったか知りたがったでしょう。男って、用心深いから。きつと肘鉄砲を喰わされたくないのよね。ねえ、教えて、あなた何て答えたの？

マージェリー あら、もちろん、「知らないんですか、わたしにはもう大きな子供が二人もいますのよ」って笑って答えた。そしたら彼、「そんなこと信じられない。あなたが二十五を超えていない方に、ピーナッツを賭ける」って言うの。ねえ、ピーナッツって何？

ドロシー 千ポンドのこと。ただ「ナッツ」って言ったら、五百ポンド。どうして男って、五百ポ

ンドを五百ポンドって言わないのかしら。

マージェリー 確かに馬鹿げてるわね。

ドロシー で、それから？ ねえ、続けて。

マージェリー わたし「もう十七になる娘がいますのよ」って言った。でもパットの年齢は伏せておいた。パットの方が年下だって考えたいんなら、それでもいいかなって思ったの。

ドロシー ちっとも非難されることじゃないわ。

マージェリー そしたら彼、「あなたはきつと揺籃の中で結婚なさったに違いない」って。で、わたし、彼を見つめて、「ええ、確かに、結婚したのはかなり若い時でした、それは認めます」って答えた。

ドロシー そう言った時の様子が目に浮かぶ。何て言うか、伏し目がちに、瞋で床を擦るみたいな……、あなた得意の仕種。あれで男は参っちゃうのよね。

マージェリー あら、無意識なのよ、絶対わざとじゃない。で、彼、わたしの手を取って、「お分かりでしょう？——世間知らずの小娘より、大人の女性の方がどんなに魅力的か」って。

ドロシー 男ってみんなそう言うのよね。でも、真実だわ、絶対。まともな男は若い娘と恋に落ちたりなんかしない。面白くないもの。

マージェリー そうよね。わたしもそう思う。

ドロシー で？ それからどうなったの？

マージェリー 彼、チャーリーは日曜には何してるのかって訊くの。「いつもゴルフです」ってわた

し答えた。すると彼、「やれやれ、チャーリーらしい」って言って、いつか日曜に田舎へドライブに行かないかって誘うの。

ドロシー それで？ 行くことにしたの？

マージェリー 何言ってるの。もちろん断ったわ。だって、あの人のことほとんど知らないんですもの。

ドロシー 付き合ってみなきゃ、どんな人か知りようがないじゃない。

マージェリー そんなことできないわ、子供たちのこと考えたら。

ドロシー チャーリーは日曜ごとにゴルフを楽しんでるのよ。あなただって、ドライブくらい行ってるっていいじゃない。

マージェリー ねえ、わたしのこと分かってるでしょ？

ドロシー 人に思わせたがってるほど冷たい人間じゃない、……ね？

マージェリー ええ。でも、これまでチャーリーは他の女に目をくれたことなんて一遍もない。あの人の気分を害するようなことはしたくないの。

ドロシー 知らないでいる分には気を悪くすることもないでしょう。度を超したらまずいけど、ちょっとくらいだったら亭主以外の男と付き合っても害にはならないわ。それどころか、若さを保ちたいんなら男性に注目してもらうのが一番。そう言うじゃない。

マージェリー それはそうだけど。

ドロシー ねえ、分かってくれると思うけど、わたし結婚以来一度だってアルフレッドを裏切ったことないわ。でも「いい人」だったら沢山いた。だから今でも若くて、元気で、時代に遅れないでいられるのよ。

マージェリー 平凡な結婚生活に何か埋め合わせが必要だってことは分かる。

ドロシー 亭主としてアルフレッド以上の人は望めないし、それに、あの人がわたしを裏切るような人じゃないことは充分承知してる。でも、もし他の男性とのちよつとしたお付き合いがなかったら、わたし、あの人のいかにも「良き夫です、良き父親です」って態度には耐えられないと思う。

マージェリー 「亭主元気で留守がいい」って本当ね。一日中家にいられたんじゃ、どうしたらいいか分からなくなる。

ドロシー どう、最近チャーリーは？

マージェリー あなたも会ったでしょ。いつもどおりよ。あの人が変わるなんて有り得ないわ。

ドロシー そうね。もう長い付き合いになるけど、正直、旦那様としてはかなり退屈でしょうね。

マージェリー 十九年って、長いわ。

ドロシー はつきり言って長すぎる。

マージェリー 不満はないの、それは確か。欲しい物は何でも買ってくれるし……。

ドロシー 喧嘩したことは？

マージェリー 一度も。あの人が、大声を出すこともないのよ。でも、当然だけど、あの人には限界があるの。

ドロシー 男ってみんなそんななのよ。しょっちゅう思い知らされる。

マージェリー あの人、美術とか文学に興味がないでしょう？ 知的な人たちを我家に招待すると、居場所がないみたいなの。

ドロシー 気がついてたわ。チャーリーはとつても善い人よ。でも、いわゆる才気煥発って人じゃないわね。

マージェリー ええ、残念ながら。かわいそうな人。人間、すべてを持つってわけにはいかないのよね。あの人、今でも結婚した時と同じようにわたしのこと愛してくれてるわ。だから、欠点をあげつらうのは酷いと思うんだけど……。

ドロシー あげつらってるわけじゃないわ。長いこと一緒に暮らしてれば、いやでも相手がどんな男か、どんな男じゃないか、分かってくるのよ。

マージェリー わたし、時々怖くなるの、——もしここ何年もあの人を愛していないって分かっちゃったたら……。つまり、女が男に感じる愛情って意味なんだけど。

ドロシー その点じゃ、女の方が優位に立ってるわね。男には状況が真面に見えないんだから。

マージェリー もちろん、わたし、あの人が好きよ。だから、傷つけるようなことするつもりはない。でも、わたしは知的なことが好きでしょ、だから、あの人はずっと退屈だつて言わざるを得ないの。

ドロシー もしこう言ってよければだけど、ねえ、マージ、要はチャーリーにはユーモアのセンスがないってこと。

マージェリー 分かってる。そこが悲劇的な……。ドロシー、ちよつと怖ろしいことを訊くけど赦

して。あなた、自分が未亡人になったら何をしようかなって考えたことある？

ドロシー 女なら誰だつて考えるんじゃない？

マージェリー もしチャーリーに何かあったら、わたし、どうしていいか分からなくなると思う。き

つと涙が涸れるまで泣くわ。そうして、あの人がいなくて寂しく思う、最初のうちは……。

ドロシー そうでしょうね、あなたほど優しい気持を持った人はいないから。

マージェリー でも、そのショックから立ち直ったら、きつと幸せな気分になると思うの。

ドロシー でしょうね。その金髪に喪服はよく似合うもの。

マージェリー もう二度と結婚はしない。女だったら誰でも一度はすべきよ。でも一度でたくさん。

ドロシー あら、わたしだったら、家には誰か男の人にしてほしいと思う。だって、何だか物足りなくない？

マージェリー わたし、自分にはいろんな資質があると思うの。いちいち誰かに相談する必要なしにやりたいことがやれるって、素敵だわ。好きなお友達と自由に付き合っつて、好きな時にパリやリヴィエラに行く。「チャーリーは仕事を外せないわ」とか、「わたしがいなかったら途方に暮れちゃう」なんて悩む必要なしにね。それに、教養を高めることだってできる。夫がいたんじゃ、実際、教養を高めるなんてなかなかできないじゃない。

ドロシー リヴィエラつて言えば、あなた、この夏リヴィエラへ行きたいって、もうチャーリーに話した？

マージェリー それが結構難しいのよ。あの人はいつともおりテムズ川の避暑地へ行くつもりでいる。

好きな時にロンドンへ行つて仕事ができるから便利だつて。

ドロシー じゃあ、我家の亭主と行けばいいのよ。夫婦がいつも一緒に休暇を過ごさなくちゃならないなんて、馬鹿げてる。お互い、気分転換にならないじゃない。

マージェリー リヴィエラに行けたら、あの子たちも喜ぶでしょうね。

ドロシー わたしたちの邪魔にはならないはずよ。子供は海で泳いだり、ボートに乗ったりすればいいんだから。バカラの部屋に入るにはまだ若すぎるでしょう。ねえ、マージ、きっと良い息抜きになるわ。

マージェリー 素敵でしょうね。

ドロシー この間ボンドストリートで洒落たバジヤマを見つけたんだけど、リヴィエラじゃ一日中バジヤマを着てもかまわないんだつて。

マージェリー そうらしいわね。でも、凄く高いんでしょう？

ドロシー 使わないお金にどんな価値があるつて言うの？ ねえ、チャーリーを説得するには、リヴィエラ行きは子供たちにとつてとても良い教育になるつて言えればいいのよ。

パトリックが入ってくる。続いてすぐに他の三人も。

パトリック 母さん、ひどいじゃん。テニスコートにラインが引いてなかったよ。

マージェリー あら、そうだった？ ごめんなさい。

パトリック 庭番をとちめてやった。あいつ、そんな指図は受けてないつて、でかい顔で言うんだ。マージェリー あの庭番はちよつと鈍いのよ。わたしは言ったつもりよ。

パトリック この家は僕がいなくなった途端に何もかもおかしくなる。

マージェリー いま線を引いてるの？

パトリック うん。でも、あと十五分は掛かるな。ジュディー、おまえがちやんと見ててくれりや良かったんだ。おまえは何のためにいるんだ？

ジュディー 何それ。まるであたしが暇で暇でしようがないみたいな言い方。あたしだって忙しかったの。だから忘れちゃったの。

パトリック まったく、役立たずが！

マージェリー パット、帰った早々そんなに不機嫌にならなくてもいいでしょう。時間はいっぱいあるんだから。

ダイアナ ねえ、レモネードか何か飲みたいんだけど。あたし喉がからから。

マージェリー 台所にあるわ。サイドボードの上。

パトリック 我家もハードコートにすべきだよ。今時、芝のコートなんて。

ティモシー 僕も親父に言ったんだ、絶対我家のコートもハードにするべきだ、芝の上でいくら練習したつて上手くなれないつて。

パトリック 母さんから頼んでよ。もし僕らにこの家においてほしいんなら、普通の生活をしてくの最低限必要なものくらい用意してくれたつていいだろう。

マージェリー でも、随分とお金が掛かるんじゃないの？

ティモシー まあ、見苦しくない程度のもので四百ポンドつてとこですね。

パトリック そのくらい、どうってことないじゃん。考える必要なんてないよ。どうせ親父だって、僕らのために使う以外に使い途はないんだから。

マージェリー それはそうだけど。

ダイアナ ねえ、レモネードは？

ジュデイー あたしも飲みたい。

(玄関ドアの呼鈴の音が聞こえる。)

あれ、誰かな。お客さんじゃないけれど。

マージェリー わたしは今日は留守だって、そう言うように伝えておいたんだけど……。

パトリック 近所の人が御機嫌伺いに来るなんて、まさに田舎だな。地の果てだ。

マージェリー 莫迦なこと言わないの。このご近所には、芸術家とか、学者とか、知的な人がいっぱい住んでるの。そういう人たちとお茶を飲みながらお喋りするの、とっても楽しいことなのよ。

玄関の開く音。バトル夫人はいらっしやるかという声が聞こえる。

ドロシー あら、アルフレッドだわ。

マージェリー ジュデイー、ドアを開けて。(ジュデイーがドアを開けると、マージェリーは声を高

める。)アルフレッド！

アルフレッド (ドアの奥から) やあ、こんにちは、こんにちは。

マージェリー さあ、入って。ドロシーもいるわ。

アルフレッドが颯爽と入ってくる。大柄で、がっちりした体格、赤ら顔の中年男。元気いっぱい、愉快そうに大声で話し、自分の言うことにいちいち笑い転げる。

アルフレッド (マージェリーの手を取って) やあ、カワイコちゃん。(パトリックを見て) よう、また何方かと思いきや、いつご帰還で、若大将？

パトリック (アルフレッドと握手しながら) お昼ちよつと前。

アルフレッド なるほど、そういうこと。放蕩息子の御帰還に、お母上が太った子牛を屠ってくれた。

それを食べ損ねないように、昼食前にお戻りになったってわけだ。

パトリック (横柄に) 冷たくなった鶏肉を一口飲み込んだだけですよ。

アルフレッド で、どうだい、若大将、永遠に高校に別れを告げた気分は？

パトリック 結構毛だらけですよ。

アルフレッド 高校時代ってのは人生で最高の時だ、えつ、大将。が、まあ、終わっちゃったことは終わっちゃったこと。時計の針は巻き戻せない、最後の審判の日まではな。それが人生つてもの。しかし、人に先んじて一番良い席を取っちゃって、他の奴に取られないようにしていれば、人生、

まんざらでもない。

ティモシー まったく。くだんないことしか言わないんだから。

ドロシー ティム、お父さんにそんな言い方はないでしょう。

アルフレッド なーに、悪ガキには言いたいことを言わせておけて。 // 親には孝行“なんて糞喰ら

えだ。ティムと俺とは友達みたいなもんだからな。なあ、若殿？

ティモシー まあね。ところで、アルフレッド、ハードコートはどうなった？ 考えとくって言った

だろ？

アルフレッド 若殿、いささか金が掛かり過ぎます。

ティモシー でも、出せないわけでもないんだろ？ 頼むよ。

アルフレッド (莞爾として) まあ、若殿のお望み故、御意に副うよう誠心誠意善処する所存にござ

います。

ティモシー そうことなくっちゃ。

アルフレッド で、ジュデュー嬢、姫君におかれましては御機嫌麗しゅう？ 本日は些か沈んだ御様

子とお見受け致しまするが。

ジュデュー 自分じゃそうは思っていないけど。

アルフレッド 恋でもなされましたか？

ジュデュー なされません。

アルフレッド で、ご婚礼の儀は何時に？

ジュデュー 考えたこともございません。

アルフレッド また何故？ 差し支えなければ、その理由などお教え願いたく……。

ジュデュー ひとつには、どなたもお申し込みくだされぬ故。

アルフレッド こりやまた。我が家のおしゃま娘ダイアナ姫なんぞ、週に三回はプロポーズされてお

りますぞ。(ダイアナに) だろ？

ダイアナ 何言ってるの、アルフレッド、そんなことないよ。

アルフレッド 信じてはなりません、姫君。不肖このアルフレッド、先刻承知之助。吾輩が承知し

ていると申せば、承知しているということ。家父長権ってやつにござります。が、それにして

も、この可憐な姫君を捨て置くわけには参りません。(ティモシーに) おい、ニギビ面のお若

いの、おまえがお姫様にプロポーズしろ。そうすりやお姫様だって、一度は色男を袖にしたって

自慢できるんだ。

ティモシー その気はないね。

ジュデュー なんと賢き若君！

ドロシー ところで、あなた、どうしてこんなに早く仕事を抜けてきたの？

アルフレッド 突然愚妻に会いたくなかった故。

ドロシー もう！ いい加減にして。

アルフレッド 詮方無いのだ。堪えようとはした、が、所詮無益なこと。これが拙者の性なのだ。：

…っと、まあ、冗談はこのくらいにして、実はチャーリーに会いに来たんだ。

マージェリー ここにはいないわ。シティーのはずよ。

アルフレッド それが、いないんだな。少なくとも私には居所が判らない。今日一日、事務所に姿を現してない。

マージェリー へんね。

アルフレッド それが、そうとも言えないんだ。実を言うと、ちよつぱりびりつと心配してるんだ。

マージェリー (驚いて) どうして？

アルフレッド チャーリーは何も言わなかった？

マージェリー ええ。何のこと？ 何かあったの？

アルフレッド 多分チャーリーは、うまくいくかもしれないから、わざわざ君らに知らせて心配かける必要はないって考えたんだな。逆に、もしうまくいかなかったら、どのみちすぐに判っちまうだろうと。

マージェリー で、いったい何のこと？

アルフレッド 言わないでおくべきだったかな。

パトリック まさか、父さん破産したんじゃないでしょうね。

アルフレッド 君ら若い者は庭に行つてた方がいい。ドロシー、おまえは残ってくれ。

パトリック 何か問題があるんなら、僕とジュディーには話してくれた方がいいでしょう。どうせ、

小父さんが帰つたらすぐ母さんから聞けるんだから。

ダイアナ さあ、タイム、行こう。話が済んだら呼んで。

ダイアナとティモシーは庭に出てゆく。

マージェリー アルフレッド、また例の悪い冗談じゃないでしょうね？

アルフレッド なら良いんだが。今回は違う。真面目な話なんだ。ところで、トミー・エイヴオンって男が銃で自殺したのは知ってるかな？——先週の金曜だが。

マージェリー ええ、知ってる。怖ろしいことだわ。わたしたち知合いだった。去年は一緒にアスコットへ行つたわ。

パトリック 誰？ そのトミー・エイヴオンって。

アルフレッド シティーじゃ名の知れた男だ。親父さんのお得意さんの一人さ。まったく好い奴だった。最高の奴だったよ。しかし、残念ながら、今回は親父さんを窮地に追い込んじゃまった。

マージェリー でも、チャーリーはいつも堅い投資をしてたわ。思惑買みたいな危険なことには手を出さなかつたはずよ。

アルフレッド そうだ。だからこそ、今度の件はチャーリーにとって、なおさら厳しかったんだ。私は抜け目なさにかけちゃ誰にも負けないと自負してるが、その私でもトミー・エイヴオンにだってたら躊躇ためらわず百万ポンド預けたね、——勿論、あればの話だが。

ジュディー けど、一体、何があったの？

アルフレッド 言っても解らんだろうが……。要は、今日が決算日で、誰かが助け舟を出してくれな

かったら、親父さんは証券取引所から除名されるってことだ。
ジュデュー 除名されるとどうなるの？

アルフレッド 破産ってことだ。

マージェリー (狼狽して) ああ、どうしたらいいの？

ドロシー マージ、しっかりして。まだ決まったわけじゃないんだから。

アルフレッド 有難いことに、親父さんには良い友達が沢山いる。勿論資産は全部処分しなくちゃならないだろう。しかし、誰かがそれなりに援助してくれば、今回の嵐はなんとか凌げるはずだ。

パトリック 家や車は売らなくちゃならないってこと？

アルフレッド それは判らん。しかし、この嵐を潜り抜けることさえできれば、収入は今までとさして変わらんはずだ。なんたって親父さんはこれまで堅実そのものの仕事をしてきたし、評判だつてすこぶる好いんだから。

パトリック じゃあ、そんなにひどいってわけでもないんだ。

アルフレッド 貯めといた金は全部吐き出さなくちゃならんがね。

マージェリー わたしたち一文無しになるかもしれないってこと？

パトリック 母さん、安心しなよ。親父は岩みたいに頑丈だから。つい先刻もジュデューに言ったんだ、——親父は多分百まで生きるってね。大丈夫、また一財産作るさ。

マージェリー それで、あの人切り抜かれるかどうかは何に懸かっているの？

アルフレッド まあ、簡単に言えば、アーサー・レターが助け舟を出してくれるかどうかだ。

パトリック そのアーサー・レターって？

アルフレッド 親父さんの取引銀行の頭取さ。昨夜親父さんに決定を伝えることになってたんだ。

マージェリー そういわけて帰りが遅かったのね。夕食のための着替えにやっと間に合ったのよ。

わたしたち昨夜はサヴォイで食事したの。

アルフレッド チャーリーはどんな様子だった？

マージェリー いつもと同じだったわ。

アルフレッド いつもと同じ？ そんなはずないんだがな。まさにその二、三十分前に決まっていたはずなんだから、——自己破産を申請するか、それとも、どうにか名を汚さずに遣り直せるか。

マージェリー わたしは何も気が付かなかった。予約の時間に遅れるんじゃないかって心配してただけ。

アルフレッド 今朝は？

マージェリー わたし、食事は自分の部屋でとったの。ジュデューと一緒にいたと思うけど。

アルフレッド ジュデュー、お父さんはどんな様子だった？ 嬉しそうだった？ それとも落ち込んだか？

ジュデュー 正直、注意してなかった。あたし、朝食の時いつも新聞読んでるし。

アルフレッド じゃあ、何も分からずじまいってことか。今朝十時に会うことになってたんだが、チャーリーは現れなかった。重要な約束だったんだ。それで変に思った。

ジュデュー 父さん九時半頃家を出たよ。

マージェリー アルフレッド、あの人今日は一度も事務所に顔を出していないってこと？
アルフレッド そうだ。
パトリック (喘ぐように) もしかしたら……。

チャールズが自殺したかもしれないという考えが、皆の脳裏に浮かぶ。

マージェリー (動揺して) そんな！ いや。いやよ。そんなこと有り得ない。あの人がそんな、そんな……。

ジュデュー そうですね、父さん今朝何となく変だった。小父さん、あたし怖い。あたしたちがケジヤリーを食べる時、父さんが……、父さんが心の中で……。

マージェリー ジュデュー。いやよ、ジュデュー、そんなこと言わないで。お父さんはそんな酷いことできる人じゃない。

パトリック 小父さん、小父さんは有り得ると思います？——父さんが、そんな……

アルフレッド なあ、パット、実は、ここに来たとき私が考えてたのは、そのことだったんだ。いつものように陽気に振舞おうとはした、が、正直言うと、大変な努力だったんだ、——多分君らも気がついてたと思うが。チャリーは几帳面過ぎるほど几帳面な奴だ。これまで人と会う約束を反故にしたことなんて一遍もない。

マージェリー (少しヒステリックになって) いやよ、やめて、やめて。わたし怖い。

ドロシー マージ、落ち着いて。まだそうと決まったわけじゃないんだから。

マージェリー じゃあ何故事務所にいないの？——今日に限って。(アルフレッドに) そんな大切な

約束だったの？

アルフレッド ああ。もし沈没しかかった船から何か救い出したいんなら……。

ドロシー きっと車に撥ねられて、意識不明でどこかの病院に担ぎ込まれたのよ。

マージェリー そんなの全然慰めにならない。

パトリック 何かできることはないのかな。

ジュデュー テムズ川を浚ってもらうっていうのは？

パトリック 馬鹿。テムズを浚うなんてできっこないだろう。

ジュデュー じゃあ、ヒースにある池を浚ってもらうっていうのは？

マージェリー やめて。やめて。あの人は誇り高い人なの。それにとても繊細で……。ああ、わたし

怖い。破産したってわたしたちに言うくらいなら、あの人……

ドロシー マージ、言わないで。縁起でもない。

パトリック 警察に行くべきじゃないかな。

アルフレッド もう少し待った方がいい。突然親父さんが現れたら、馬鹿みたいだろう。

ドロシー わたし、病院という病院に電話するべきだと思う。

マージェリー 何かしなくちゃ。このままじゃ気が狂いそう。

アルフレッド もし夜になっても戻らなかつたら、もちろん警察に連絡する。

パトリック 有線放送で流してもらったら？ よく行方不明者のお尋ねってやってるじゃない。
ジュディー でも、ホワイトストーンの池に沈んでたら、役に立たないよね。

マージェリー チャーリーのせいで、この子たちが世間に顔向けできなくなっちゃう。

ドロシー マージ、そう悪い方へ悪い方へって考えないの。アルフレッドが何とかしてくれるわよ。

例えば、一時的な心神喪失だとか何だとか。

パトリック 勿論、ちよつと記憶を失っただけで、二、三日したらどこかにポツと現れるってことも有り得るし。

ジュディー 多分ボーンマスだよ。行方不明の人が見つかるのは大抵ボーンマス。

ドロシー でも、ねえ、あなた、どうして電話しないの？——その問題の、資金を出してくれるかど

うかって人のところへ。その人に訊いてみれば、チャーリーが絶望的な状態なのかどうか判るじゃない。

アルフレッド アーサー・レターに？ ロンドンの大銀行の頭取をつかまえるのは、そんな簡単なこ

とじゃないんだ。それに、電話に出てくれたとして、はたして情報をくれるかどうか……。

ドロシー でも、やってみる価値はあるわ。

マージェリー お願い、アルフレッド、電話して。

アルフレッド しかし私なんかと口を利まいてくれるかな。……まあ、焼いて喰われるってこともないだろう。電話してみるか。

アルフレッドは出てゆく。

マージェリー こんな宙ぶらりんな状態、耐えられない。

パトリック 親父は今朝シルクハット被かつてた？

マージェリー パット、馬鹿なこと言わないで。そんなこと関係ないでしょう。

パトリック 僕はそうは思わない。ぜひ知りたいんだ。

ジュディー 確か、被かつてたよ。もし被かつてなかったら、気がついたはずだもん。

パトリック じゃあ、家を出た時は自殺は考えてなかったってことだ。

マージェリー どうして？

パトリック 正気の男だったら、自殺しようって時は、普通、シルクハットなんか被からない。

ジュディー けど、もし一時的におかしくなったら？ 父さんあるとき正気じゃなかったのかもしれないじゃない。

パトリック 女には分からないのさ。自殺しようって考えてる男が被かるのは当然ゴルフキャップだ。

そうじゃなかったら、せいぜい、山高帽さかたけぼうしさ。

マージェリー パット。お父さんは几帳面な人だから、何をやるにしても、燕尾服タキシードにゴルフキャップだなんて有り得ない、絶対有り得ない。

パトリック そこさ。だから、シルクハットで出掛けたってことは、いつもといっしょの精神状態だったってことなんだから、自殺はしてないってこと。

ジュディー そうかなア？ 川へ飛び込む前に土手の上に残しておくことだってできるし。

パトリック で、通りかかった連中が、「あれあれ、ピッカピカのシルクハットさん、こんな所で一体何を？」って訊くわけだ。

ドロシー アルフレッド遅いわね。何してるのかしら。

マージェリー 怖ろしいわ。ほんの先刻までみんなとても幸せだったのに。夏はリヴィエラに行きましようなんて話してて、心配事なんて一つもなかった。なのに、こんなことになるなんて。

ジュディー 人生ってそんなもんじゃない？

パトリック ジュディー、どうしてそんな悲観的なことばかり言うんだ。もし他に言うことがないんなら、少し黙っててくれ。

ジュディー けど、事実をちゃんと見るべきじゃん。あたしの勘だと、父さんはホワイトストーン池の底だよ。絶対そう。

アルフレッドが入ってくる。

アルフレッド さあ、少年少女諸君、御安心あれ。良い知らせだ。

マージェリー アルフレッド！

アルフレッド 私が名前を言っただけで、すぐアーサー卿につないでくれた。大丈夫、こっちのことは何にも漏らさなかったから。アルフレッド小父さんを信用してよろしい。アーサー卿が言うに

は、チャーリーとは昨夜屋敷で会ったそうさ。それで、チャーリーの人柄とこれまでの仕事ぶりを考慮して、債務を全て返済できる額を貸すことにした、そう言ってた。

マージェリー ああ、ありがたい。なんて善い人なの。

アルフレッド だから、チャーリーちゃんがああ豪華なお屋敷を後にした時には、ポッケの中にとんでもない額の小切手が入ってたってわけさ。

マージェリー 助かった！

ドロシー でも、ならどうして事務所にいないのかしら。

アルフレッド まあ、それは大して重要じゃない。多分返済のためにそこらを歩き回ってるんだろう。帰ってきたら、自分で説明してくれるさ。なんたって、大切なのはチャーリーがこの嵐を乗り切ったってこと。

パトリック 除名されずに済むってこと？

アルフレッド そう。親父さんは落馬寸前までいった、が、どうにか鞍にしがみついて、落馬はまぬがれた。なに、また二、三年すりゃ、元に戻るさ。もちろん、尻に火が着いたみたいに猛烈に働かなくちゃならんがね。

ジュディー 父さんは働くのは苦にならないから。その点は大丈夫。

アルフレッド 苦節三年……。さて、三年で済むかどうか。遊んでる暇はこれっぽっちもないだろうな。

パトリック 別に苦にはならないでしょうよ。親父くらいの年齢になれば働く以外にやることなんか

ないんだから。

マージェリー あたし、これまでは、あの人が無趣味だったこと気の毒に思ってたけど、でも、こうなってみると、無趣味で良かったって思う。

アルフレッド 君ら悪ガキ諸君も贅沢を言っちゃいかんぞ。分かるとるな。当分の間、親父さんは無駄金を使うわけにはいかんのぞ。

パトリック 分かっています。僕も喜んで協力しますよ。な、ジュディー、暫くはあのおんぼろ車で我慢するよな。

ジュディー 嬉しくないけど、しょうがない、我慢する。ハードコートもおあずけつてことだね。

マージェリー ジュディー、あの二人を呼んで。もう、外にいなくちやならない理由はないでしょう。

ジュディー 分かった。(窓の所で) ダイアナ、タイム、入って。

マージェリー あなたたち、テニスしてきたら？ やりたいんでしょ？

ジュディー こんな興奮してて、ラケットにボール当たるかなア。

アルフレッド テニスをするのか。では、拙者も、あの両家を隔てる塀を跳び越え、お召替えとしよう。君ら若造に、この老木にも未だ命の水が脈々と通っていること、御覧にいれましょうぞ。

ダイアナとティモシーが入ってくる。

ジュディー ねえ、ねえ、何があったか判る？ スリル満点！ 父さんが行方不明になっちゃって、

みんな、自殺したんじゃないかって。あたしたち一家は破産で、家から何から全部手放さなきゃならない、一時はそう思ったんだよ。でも、今はもう大丈夫。父さんは自殺してないって判った。

ダイアナ 何もかも話すつもりだったんなら、べつにあたしたちを追い出すことなかったと思うんだけど。

ジュディー あたしは追い出したかったわけじゃないよ。でも、とにかく凄かったの。母さんなんてヒステリー状態になっちゃうし。けど兄さんは唇を噛みしめて立派に耐えてた。うら若きわたしも勇敢に耐えた。

ダイアナ で、何もかも取越し苦労だったってわけ？

ティモシー またアルフレッドの冗談だったってこと？ あんまりやりたいようにやらせておいやいけないよな。最近ちよつと凶に乗りすぎだよ。

アルフレッド まあ、若殿、そう手厳しいことをおっしゃらずに。未だ一件落着というわけでもござりませぬ故。

パトリック 破産は破産なんだ。

ジュディー 破産で言っても、パットが自分の車を買えなくなったことと、古いテニスコートで我慢しなくちやならないってことくらいなだけだね。まあ、そのうちまた父さんが稼いでくれるよ。パトリック でも、ちよつと辛いな。

ティモシー ウインブルドンだって芝の上でやるんだ。僕らだってできるさ。今は緊急事態なんだから。

アルフレッド そうこなくては、若殿。嬉しきことを仰せられる。それでこそ真の侍。

ダイアナ それで、チャーリー小父さんは今どこ？

パトリック それが判らないんだ。

マージェリー ああ、それさえ判ったら。

ジュデュー 記憶を失くして、ボーンマスの海岸のベンチにでも腰掛けてるんじゃないかって、そう話してたんだ。シルクハットを被ってね。

パトリック ボーンマスよりスラムにいそうな気がするな。

マージェリー やめて。そんなこと言わないで。いくら記憶を失くしたからって、あの人がスラムに行くなんて絶対有り得ない。

ドアが開き、チャーリーが笑顔を浮かべて、のんびりと入ってくる。四十代前半。物静かな男で、品のある顔付き。きちんとした黒の背広にピンストライプの灰色のズボン。それにシルクハットを被っている。

マージェリー あなた！

〔幕〕

第二場

幕が上がると、チャールズ以外の人間は全て舞台上にいる。

ティモシー ウインブルドンだって芝の上でやるんだ。僕らだってできるさ。今は緊急事態なんだから。

アルフレッド そうこなくては、若殿。嬉しきことを仰せられる。それでこそ真の侍。

ダイアナ それで、チャーリー小父さんは今どこ？

パトリック それが判らないんだ。

マージェリー ああ、それさえ判ったら。

ジュデュー 記憶を失くして、ボーンマスの海岸のベンチにでも腰掛けてるんじゃないかって、そう話してたんだ。シルクハットを被ってね。

パトリック ボーンマスよりスラムにいそうな気がするな。

マージェリー やめて。そんなこと言わないで。いくら記憶を失くしたからって、あの人がスラムに行くなんて絶対有り得ない。

ドアが開き、チャーリーが笑顔を浮かべて、のんびりと入ってくる。

マージェリー あなた！

チャールズ (帽子を脱りながら) ただいま。

マージェリー (かなり動揺して) あなた！ どこにいたの？ 心配してたのよ。ああ、ひどい人。
チャールズ 私が？ 私が何かしたかな？

マージェリー 怖ろしかった。どうしちゃったんだろうって。

チャールズ (冷静に) 何故？ 何があったんだい？ やあ、パット。夏休みか。

パトリック ただいま。

チャールズ 元気そうだな。学校はどうだった？ 楽しかったか？

パトリック まあね。

チャールズ やあ、みんな。アルフレッド、ばかに早いお帰りじゃないか。まさか、さぼってるんじゃないだろうな。

アルフレッド チャーリー、一体どこにいたんだ。ずっと捜してたんだぞ。

チャールズ 私を？ 私ならハムステッドヒースを散歩していたが。

アルフレッド 散歩？

マージェリー 一日中？

チャールズ いや、ちょっと洒落たバブを見つけね、そこで昼飯を食べた。肉を一切れとビールだ。

美味かったよ。

アルフレッド どうして事務所に行かなかったんだ。

ジュディー あたしたち、父さんはきつと自殺したんだって……。

パトリック ジュディーはホワイトストーン池を浚ってもらえて……。

マージェリー とっても心配してたのよ。

チャールズ 私が鈍いのもかもしれないが、しかし、何の話かよく解らん。

アルフレッド まあ、チャーリー、みんなに例のことを話したんだ。それに、おまえさんが約束の時
間になっても現れなかったこと、事務所にも行ってないことをな。

チャールズ あ、そう。(明るく) でも、もう解ったろう？

パトリック うまく行ったって聞いたよ。

アルフレッド みんな動揺して、どうしてもアーサー・レターに電話しろって言うんでね、仕方なく

かけたわけさ。アーサー卿は昨夜のことを全部話してくれた。

チャールズ 善い人だ、そう思うだろう？

ジュディー 父さん、完全に破産？

チャールズ 債務不履行だ。

ジュディー それって？

チャールズ 株式仲買人が債務を履行できないと証券取引所から除名される。

アルフレッド そうなれば、もう株の売買は一切できない。
チャールズ やあ、ドロシー。帽子が新しくなったみたいだね。

ドロシー (蠱惑的に) 気がついてくれた? どう、気に入って?

アルフレッド まあ、チャールシー、ちょっと話がしたいんだ。ティム、おまえとダイアナは外してくれないか。

ティモシー 分かった。

パトリック わるいな。テニスはお流れみたいだ。

ティモシー なーに、いいさ。ゴタゴタしてるんだから。

パトリック 家族を持つことに伴う必要悪の一つだな。

チャールズ 二人でウォーミングアップでもしてたら? パットとジュディーもすぐ行くから。

ティモシー いいですよ。

チャールズ 長くは掛からない。

ティモシー 気にしないで。急がなくなっただけいいですよ。

チャールズ (幾分皮肉っぽく) ありがとう。

ダイアナ じゃ、行こう。

ダイアナとティモシーはゆっくりと出てゆく。

ドロシー わたしも出てった方がいい?

マージェリー ここにいて、お願い。ハムレットじゃないけど、不吉な予感がするの。デンマークのどこかが腐りかけてるような。

アルフレッド マージ、今は教養講座の時間じゃないんだ。

マージェリー ごめんなさい。分かってる。でも、だからこそドロシーにいてほしいの。女性には他の女性の支えが必要な時があるのよ。

アルフレッド で、チャールシー、一日中一体どこにいたんだ。思いつくところには全部電話した。

チャールシー だから言っただろう、ハムステッドヒースを散歩してたって。

アルフレッド しかし、十時に私と会う約束だった。

チャールズ (微笑んで) 解ってもらえんだろうな、——君との約束がどんなに煩わしかったか。

アルフレッド おおきに、ありがとよ。しかし、会いたいといったのはおまえさんなんだぞ。

マージェリー ヒースで何してたの?

チャールズ 散歩、考え事、景色を楽しむこと。

アルフレッド 一分一秒が途轍もなく大事な意味を持つてるって時に?

チャールズ だからこそ、なおさら景色は魅力的に見え、将来への展望は開けたってことさ。

パトリック この場を暗くしようって気はないんだけど、何だか、父さん無理にふざけてるみたいだな。

マージェリー パット、なんて馬鹿なことを。お父さんはそんな人じゃないって分かってるでしょ。

アルフレッド (抜け目なさそうな目つきで) 何だか今回は裏がありそうだな。うん、そうに違いない。どうだ、チャーリー、違うか？

チャーلز トミー・エイヴオンが自殺したって聞いた時はほんとに参ったよ。(彼はこの言葉以外にも座談を楽しんでいる風に、ゆっくりと、しかし、自分の言っていることが何か重大な意味を持っているという風には聞こえない調子で言う。)

アルフレッド まあ、あれがあいつにできる最善のことだったんだろう。生きてたとしても十四年は喰らっただろうからな。

チャーلز 私はしこたまやられた。

アルフレッド おまえさんだけじゃないさ。私の顧客も大勢損害を被った。あの悪党のお蔭でな。

チャーلز 私は会社を誇りにしていた。自分の名声は業界の高いところに位置しているなんていう罪のない虚栄心もあった。皆んながこつちを指差して、「チャーリー・バトルだ。あいつは好い奴だ。あいつなら英国銀行と同じくらい安全だ」って言ってくれるのが嬉しくてね。正直、自己満足を感じてたよ。

アルフレッド だからアーサー・レターも、おまえさんが窮地に陥入っているのを知って、喜んで助け舟を出してくれたんだ。シテイーじや、良き評判こそ最高の財産だ。

チャーلز あの打撃を喰らった時、最初に考えたのは会社のことだった。会社を救うためなら自分の金は一文残らず犠牲にするつもりだった。打てる手はすべて打った。

アルフレッド 言わなくても解ってる。おまえさんがやった以上のことは誰にもできなかったさ。

チャーلز そして昨夜、まあサッカーで言えば試合終了のホイッスル直前に同点ゴールを決めたんだ。私は救われた。正直、吻つとしたね。

アルフレッド そうだろうとも、解るよ。

チャーلز 今日は決済の日だ。毎日が悪夢の連続だったが、昨夜になって、負債は返済できることになった。これまで蓄えた金はすべてなくなってしまうが、それがどうだつていうんだ。会社は救われたし、私の名声も地に落ちないですんだ。名誉ってやつは面白いよな。みんな、この名誉ってものにどんなに価値をおいていることか。習慣の力ってやつかな。

ジュデュー 父さんは立派だったよ。こんなことが起こってるなんて誰も気がつかなかったもん。母さん気がついてた？

マージェリー いいえ、夢にも思わなかった。

チャーلز そりや良かった。ちよつとばかり不機嫌だったんじゃないかと気にしてたんだ。

ジュデュー (明るく) いつもの不機嫌と同なじだったよ。

チャーلز 今朝家を出た時はとても好い気分だった。他人には私が一財産手に入れたように見えたかもしれないな、一財産失ったんじゃないやなくて。私は地下鉄に向かって歩いていて、いつものように見えた。まあ、除隊して以来多かれ少なかれ同じような毎日だったが……。何人かの知合いに会釈した。皆んな同じように駅へ向かって急いでいる。そして駅に着いた。例によって大変な混雑だ。その時、急に気持が萎えたんだ。

ジュデュー 萎えた？

チャールズ なあ、ジュディー、ここ数日私は何遍も、結局この危機を乗り越えられないんじゃないかという不安に襲われた。ベッドに入った後も色んな状況を想像した。もし実際破産となったらどう対処しようか考えて、あれこれかなり細かなところまで計画を練り上げたよ。お蔭で少しは気が晴れたがね。最悪の事態になったとしても何か方策を見つけられないはずがない、そう思えたんだ。そして、昨夜、嵐は過ぎ去って、すべてを一から遣り直せるスタート地点に立っていた。これで人生の終りまで安穩に暮らせる。朝、地下鉄でシティーへ出掛け、市場を分析して株を売り買ひする。要はこれまで十二年間続けてきたのと同じ生活を続けて行ける。…と、その時突然、この破産は自分にとって自由と生命を意味してるんじゃないか、この地下鉄——皆んなが乗り損ねまいと急いでいるこの列車の向かっているのは、奴隷の境遇、死なんじゃないか、そんな考えがふつと浮かんだ。で、少し考えてみたくなって、ハムステッドヒースの森へ行ったんだ。

マージェリー でも、あなた、それは神経のせいよ。つまり、戦争以来わたしたちそうなりやすくなってるのよ。あの怖ろしい経験をした人は皆んな何かしら後遺症に悩まされてる。わたしもそう。これからずっとそれに耐えていかなくちやならない。

ジュディー けど、母さん、母さんは兵隊さん向けの食堂で働いてた時が一番楽しかったって言うってたじゃん。

マージェリー ジュディー、どうしてそんな酷いこと言うの。わたし何時間も立ちっぱなしだったのよ。わたしがあの重労働に耐えられたのは、義務は果たさなくちやいけないっていう使命感があったからだわ。

アルフレッド ジュディーちゃん、ジュディーちゃんはまだ小つちやな赤ちゃんだったから、あの時代がどんなに大変な時代だったかはお解りじゃない。それに、君たちには絶対あんな経験してほしくないな。

ジュディー 正直に言わせてもらうけど、小父さんたちは、実際鉄砲を撃ち合ってた時は別かもしれないけど、それ以外の時は大いに楽しんでたんだよ。あんな楽しい時は後にも先にもなかった、そう思ってる。だから、また戦争になれば、大抵の大人は喜び勇んで出掛けてくと思う。きっとそうだよ。

アルフレッド 我々は召集された、だから出掛けた。また召集されれば、また出掛ける、それだけのことさ。

マージェリー でも、喜び勇んでじゃなくってよ。重い心を持ってだわ。

アルフレッド 私たちがどんなに大きな犠牲を払ったか、君たちに解るかね？ それも、君たちのためだったんだ。

パトリック 僕らのため？

アルフレッド そうだ、君やジュディーや、ダイアナやティムのため、——君たちの世代のためだ。

パトリック 笑っちゃいますね。えっ、僕らこそ犠牲者じゃないですか。

ジュディー そうよ、小父さん、あたしたちが感謝してると思ったら大間違い。

アルフレッド やれやれ。いいかい、戦争が始まった時、君らはまだ生まれたばかりだったんだよ。だから、どうして君らが犠牲者なんだ。まったく理解できん。

パトリック 解らない？ いいですか、どっちを向いたって、必ず戦争の傷跡が見える。物心ついた時から僕らはずっとその重荷を感じてきたんです。僕らの世代にだって、他の世代と同じように、生きる権利はあるはずだ。なのに、あなたたちは僕らが人生を始める前にそれを滅茶々々にしてしまっただけです。

アルフレッド しかし私たちは、なにも好き好んで戦争を始めたわけじゃない。已むを得なかったんだ。

ジュデュー そうだよ。なににも戦争を望んでたわけじゃない。訳も分からず始めて、訳も分からず人を殺して、訳も分からず終えて、自分たちの人生を滅茶々々にして、あたしたちの人生を滅茶々々にして。

マージェリー ジュデュー、そんな言い方はないでしょう。あなたたちには何でも最高のものを与えてきたつもりよ。あなたたち以上に恵まれた人はそう沢山はいない。

パトリック 母さん、母さんは分かってないんだ。僕は戦後っていう暗く不安な時代の中でずっと暮らしてきた。だから当然その影響を受けてる。あなたがた大人は、僕らから精気を奪ってしまった。世の中を滅茶々々にしてしまっただけ。それを立て直そうっていう気力さえ奪ってしまったんです。

ジュデュー 失業者が多いのは戦争のせいだよ。無気力、無能な人間が多いのも戦争のせい。小切手の偽造が横行するのも、二重結婚も、道路がひどいのも、汽車がまともに走らないのも、借金や税金で首が廻らないのも、みんな戦争のせいだよ。

アルフレッド 戦争の後にいろんな困難な問題が残るのは仕方ないことなんだ。私たちはそれに立ち向かっていかなきゃいけない。

ジュデュー でも、どうしてあたしたちまで？ あなたたちがやった馬鹿みたいなことのために、どうしてあたしたちが苦しまなくちゃいけないの？

チャールズ なあ、アルフレッド、この子たちの言うことにも一理ある。なにも私たちは戦争の間中怯えていたわけでもないだろう。いつも凍えてたわけじゃないし、いつも腹を空かしてたわけでもない。愉快なことも結構あった。

アルフレッド 私にとっちゃ恐怖以外の何物でもなかったがね。

チャールズ またまた、そんな大袈裟な。俺たちは厳しい試練を乗り越えて現在の自分を作り上げたんだ。——そう若い連中に思わせたいだけじゃないのかな。なあ、いいかげん出鱈目を言うのは止そう。この子たちの顔を見ても、そんなことまったく信じちゃいない。なつ、正直にいいようじゃないか。君だって、一時的にしる将校になれたのを喜んでた。権威は大いであって、責任は大してない。良心の咎めなしに何もしないでいられる時間も充分ある。それにいざ戦闘って時にや何ともいえない高揚感もある。私にとって戦争の思い出と言えば、肺炎に罹ったこと、尻に銃弾を喰らったこと、頭蓋骨の骨折、それに大尉に昇進したことかな。酷い目にも遭ったが、まあ、いい経験だった。愉しんだと言ってもいい。

マージェリー 生きて帰ったこと自体奇跡よ。

ジュデュー 除隊になってひどくがっかりしたんじゃない？ ねえ、違う、父さん？

チャールズ なあ、解ってくれるかな、自分は死なずに済んだ、そう考えるだけで嬉しかった。あの時三十だった。私は考えた、——自分は青春の一番良い時期を五年も無駄にってしまった、しかし不平を言っても仕方ない、残された時間を最大限良いものにするしかないってね。あれは十二年前だった。そして今、私の青春は終わった。

アルフレッド おまえさんはその時間を最高に上手く使ったさ。誰もそれを否定しない。大抵の男と同じように戦争が終わった時、おまえさんも何かから何まで一から遣り直さなくちゃならなかった。で、実際、充分納得のいくようにやってきた。立派な家もある。車もある。奥さんだってその地位に相応しい暮らしをしてるし、子供たちだって立派な学校に行ってる。それに金だってかなり貯めただろう。

チャーリー 大体五万ポンドかな。

アルフレッド その金が、おまえさんには何の越度もなく、全部なくなってしまったわけだ。確かにそうだ。しかし、他は残るじゃないか。立派な社会的地位は残る。金ならまた稼ぐさ、前以上に。だから、そんなに不平を言うことはない。

チャーリー (考えるように) 私たち株仲間が大金を稼ぐのは、小口の堅実な顧客からじゃない。大口の投資家からだ。その投資家が、一儲けすることに興奮を感じるギャンブラーだろうと、働かずに金が稼げると思っているお馬鹿な連中だろうと、結果はいつも同じ。要は、時間の問題なんだ。時間さえ経てばかなりの手数料がポケットに入ってくる。

アルフレッド 一儲けするか、大損するかは、投資家だろう？

チャーリー そうだ。しかし、時々考えてしまうんだ、——あの戦争を戦って、何度もこの命を危険に曝したのは、こんな、飼い慣らされた犬みたいな人生を送るためだったんだろうかって。

パトリック 飼い慣らされた犬みたいだとは思わないけど。

チャールズ パット、おまえは証券取引所に入ったことはなかったな。一度連れて行ってやれば良かった。大いに興味を持っただろうよ。

ジューディー 関係者以外は入れないでしょ？

チャールズ 入れない。入っているとところを見つかったら袋叩きに遭う。帽子は新調しなくちゃならんだろうな。

アルフレッド しかし、事務員みたいな顔をして入り込むことは、できないわけじゃないんだ。なに、誰にも気づかれやしないって。あの様子は、そりやア見物だよ。

チャールズ 表現のしようがないな、あの喧しさ。

アルフレッド まさに耳をつんざかんばかりってやつだ。

チャールズ 皆んな、これでもかとはばかり、大声で叫んでいる。歩いてる人間なんて一人もいない。走ってるんだ。私もあそこで働き始めた頃は毎日興奮を覚えたな。あの活気、あの喧噪。自分は生きてるんだ、そう思ってゾクゾクしたものだ。

アルフレッド まさにそうだ。

チャールズ アルフレッド、君はあの小槌の音を聞いたことはあるかな？ 誰かの除名を発表する時の、あのハンマーの音だ。

アルフレッド いや。

チャールズ 一度聞いたら忘れられん音だよ。一時間毎に、例えば三時になると、(居間の置時計が三時を告げる。)——丁度今のように三時になると——係員が二人壇上に現れて、帽子を脱^とる。まるで遺体に向かった時のようにな。そして小槌を三回打つ。みんなが壇上に目をやる。ナイフで切り裂かれたように喧噪が一瞬にして止^やむ。本当に、針が落ちても聞こえそうな静けさだ。何度聞いても、あの小槌の音と、それに続く静けさには背筋が寒くなるよ。最初に、短期国債の売買が行なわれている側^{がわ}に立っている係員が通告を読み上げる。次に、鉱業株の側に立っている係員がそれを繰り返す。「御静聴願います。ウォーグレイブ・アンド・バトル社のチャールズ・ローレンス・バトル氏は、債務履行不能となりました。」二人とも大きな嘍^{しゃ}れた声で何の感情も交えずに読み上げる。同じような文章をもう何度も読み上げているからだ。読み終えると足を引きずるように壇上を去る。暫しの沈黙が会場を支配する。どんなに非情な男でも、或る悲劇的なものを感じずにはいられない。証券取引所で働く男は、ちよつとセンチメンタルで、気のいい奴が多いんだ。だから、仲間の一人が破産したと思うと心が痛むんだ。ただ単に不運だったのかもしれない。自分の能力以上のことをやろうとしたのかもしれない。まあ、どっちにしても、仕事が順調にいつている男は、除名された男を心から気の毒に思い、仕事がうまくいっていない男は、明日は我が身じゃないかと考えてしまう。そう、皆んな暫しの間沈んだ気分になる。しかし、次の瞬間、^{あす}「だるまさんがころんだ」と言う間もなく、先刻^{さつき}静まりかえつたのと同じくらい唐突に、喧噪が戻ってくる。蜂の巣を突^ついたような騒ぎだ。ウォーグレイブ・アンド・バトル社のチャー

ルズ・ローレンス・バトル氏は忘れ去られている。彼なしでも世界は充分廻って行く。

突然電話の音。

マージェリー ジュディー、電話に出て。

チャールズ もし私にだったら、家にはいないと言ってくれ。どんなに急用だと言っても、そう言うんだよ。

ジュディー わかった。

彼女は出てゆく。

アルフレッド まあ、チャーリー、君がそんな破目にならなくてよかったよ。確かに一財産は失^なくし

たが、また作るさ。命ある限り希望ありつてやつだ。

ドロシー ここざつと、本当に不安だったでしょうね。

チャールズ ちよつとばかりね。

マージェリー どうして話してくれなかったの？

チャールズ 君を心配させたところで、どうにかなるってものでもないからね。

ジュディーが戻ってくる。

デューディー ターナーさんだった。父さんと是非話がしたいって。今いせんって言ったら、ひどく慌ててた。

チャールズ あいつらしい……。ジュディー、私の娘らしく、ちゃんと嘘を吐きとおしてくれたらうね。

ジュディー アルフレッド小父さんがどこにいるか知ってるかって訊くから、ここにいますって答えた。ターナーさん切らずに待つてる。

アルフレッド 私に何の用だろう。

ドロシー 早く行って、訊いてみて。

アルフレッドは立ち上がり、出てゆく。

マージェリー チャーリー、これで夏のヴァカンスはお預けね。

ドロシー マージとリヴィエラに行きたいなって話してたの。子供たちにとって良い勉強になるんじゃないかって。

マージェリー テムズ川はわたしも好きよ。でも、子供の教育を考えたらフランスの方がずっと良いって思ったの。最近アンティープへ行く人も多いのよ。

ジュディー 素敵！ で、母さん、タイムとダイアナも一緒？

ドロシー 実はアルフレッドにはまだ話してないの。お母さんと二人で考えてただけ。

マージェリー もちろん、こんなことが起こる前のことよ。

ドロシー (ジュディーに) お父さんは行けないでしょうね。でも、あなたたちが行くことには反対しないと思う。安いペンションに泊まればいいんだから。イギリスにいるのと費用はそんなに変わらないわ。

マージェリー 当然、うんと節約して暮らさなきゃならないけど。

ジュディー ああ、父さん、いって言って。きつと凄^すごく楽しいよ。ねえ、パット、そう思うでしょ？

パトリック 悪いってこともないね。

アルフレッドが取り乱して駆け込んでくる。

アルフレッド チャーリー、ターナーはおまえさんが除名されたって言ってるぞ。

チャールズ (冷静に) それで？

アルフレッド えらく動揺してた。すべて手配どおりに進んでるものと思ってたが、と言ってた。まさか、チャーリー、本当じゃないんだろう？

チャールズ (茶化すように) その、まさかさ。係員はあの小槌を振り下ろし、かわいいそうに、善良

なチャールリーちゃんを空高く放^{はな}つぽり投げたってこと。

アルフレッド まさか！ チャールリー、自分が何を言ってるのか分かってるのか？ 頼むよ、しっかりしてくれ。

マージェリー あなた、何がどうなってるの？

アルフレッド (声を高めて) チャールリー、一体どういうことだ？

チャールズ 先刻、証券取引所では除名の手続きがどんな風に行なわれるかドラマチックに語ってやった時、まさにあの時私は除名されたってことさ。憶えてるかい？——あの置時計が三時を打った瞬間、それに君らの注意を向けさせたこと。

パトリック そういう安っぽい劇的効果は嫌いだな。

チャールズ 私は単純でね。劇的なことは劇的にやりたいんだ。

ジュデュー 父さんにはユーモアのセンスはないって判ってるからいいけど、そうじゃなかったら、あたしたちからかわれてるって思うんだけど。

チャールズ ハムステッドヒースを歩いていると、だんだん三時が近づいてくる。三時になったら何が起こるか、それを考えたらちよつとばかり寂しくなってるね。急にみんなの顔が見たくなった。

それで帰ってきたってわけさ。

マージェリー あなたったら。信じられない。

チャールズ バッファローは自分の死が近いのを知ると、群れを離れて独り墓場に赴くというが、その点じゃ、私はバッファローとは正反対の動物だ。

アルフレッド この頭が混乱することはそう滅多にあることじゃないが、正直、今は混乱してる。負債を返そうと思えば全部返せたんだらう？

チャールズ だが、その途^{みち}は選ばなかった。

アルフレッド アーサー・レターの小切手はポケットに入っていた、……。

チャールズ 今でも入ってるよ。(彼はポケットから小切手を取り出し、アルフレッドに手渡す。) 君、すまんが、これをアーサー卿にお返しして、ご親切に甘えることは止めにしましたって伝えてくれないか。

マージェリー でも、それじゃ、わたしたち破産だわ。

ドロシー ああ、マージ、なんて怖ろしい！

アルフレッド アーサー卿のところへ行くのは別に構わないが、ホントは何か裏があるんだらう？ 違うか？ ……ドロシー、おまえはちよつと外してくれ、たのむ。

ドロシー 分かった。(マージェリーに) 何かあったら、庭にいるから。

マージェリー ありがとう。

ドロシーは出てゆく。

ジュデュー アルフレッド小父さん、あたしたちも出た方がいい？

チャールズ いや、残ってくれ。おまえたちに一つ二つ言っておきたいことがあるんだ。

パトリック でも、除名されたんなら何が出来るって言うのさ。僕らは底無し沼に落ちこちたつてこ
とだろ？

チャールズ ああ、首まで浸かってる。

パトリック なら何故そんなに楽しそうなの。

アルフレッド そうだ。理解できん。おまえさんは、実際、除名されないだけのものをポケットに入
れてたのに、わざと除名されたつてことだ。

パトリック 父さん、一体どんなとんでもないことを考えてるの。

アルフレッド 勿論おまえさんは大打撃を受けた。しかし、おまえさんだけじゃない。えっ、そうだ
ろう？——株の仲買をやつてれば、一生に一度や二度は大きな損失を被ることある。反対に、
一日で一財産作ることもだつてある。だから逆境も素直に受け入れなきゃ、——幸運ばかりじゃな
くつてな。

パトリック 不運に見舞われた時こそ、男のガッツを見せる時じゃないか。

チャールズ (眸に笑みを湛えて) そうだ、パット、まさにそのとおり。おまえがガッツを見せなく
ちゃならない時がすぐに来る。

アルフレッド あんなに大切にしてた先祖代々の会社じゃないか。それをどうして放つぽり出せるの
か、そこんところがまったく解らん。

チャールズ 心を鬼にしてるのさ。時計が三時を打った時、鳩尾みそむちのあたりにおかしな感覚があつたの
は認めるよ。

マージェリー 亡くなったお父様がとても誇りにしていらつしやつた会社よ。これ以上尊敬されてい
る会社はロンドン中探したつてそうはないつて、よくおつしやつた。

アルフレッド で、これからどうするつもりなんだ。

チャールズ (何でもないことのように) 外国へ行く。

マージェリー (突然胸騒ぎを覚えたかのように) チャーリー、まさか、あなた。何かいけないこと
を？ 逮捕状が出るんじゃないでしょうね？

チャールズ 大丈夫、安心してくれ。これからやることはかなり卑劣なことかもしれないが、法に触
れることは絶対ない。

マージェリー (弱々しい声で) 株の仲買人つてよく解らないから……。何となくいかかわしい仕事
なのよね。

アルフレッド やれやれ、何が何だかさつぱりだ。チャーリー、頼むから、解るように話してくれ。

人間、冗談で自殺はしないだろう？

チャールズ 簡単なことさ。今朝、これは生きるに値しないという結論に達したんだ。

アルフレッド 何が？

チャールズ これまでの私の人生がさ。この十二年、長い長い十二年、毎朝同じ地下鉄でシティーへ
出掛け、株の売り買いをして人生を過ごしてきた。そして月日はいたずらに経つていった。もう
うんざりだよ。心底うんざりだ。これ以上、この尊敬に値するとかいう辛気しんきくさい仕事を続ける
気はない。もういい。たくさんだ。さあ。(彼は光り輝くシルクハットを取り上げる。)これが

会社のバッジ、社会的地位の象徴だ。垢抜けたデザインで、ピカピカ光ってる。さあ、よく見ろ。皆んなこれは魔法のバッジだと思うてる。このバッジが夢のような大金をもたらしてくれると思ってる。これが人間の飽きなき欲望の象徴だ。(彼は帽子を床に投げ捨て、足で何度も踏みつけた後、それを遠くに蹴る。)

マージェリー チャーリー、チャーリー、あなた。いつもあんなに大切にしていたのに。ああ、わたしたち、どうなってしまうの？

パトリック 父さん、そんなメロドラマみたいなこと……。ほんとにそうしなつくちやいられないの？

チャールズ 人間、感情に駆られると、メロドラマみたいなことをしたくなるんじゃないのかね。

ジュディー で、あたしたちはどうなるの？

チャールズ おまえたちとは別れて暮らす。

パトリック いつまで？

チャールズ 永久にだ。

パトリック (吃驚して) どうして？

チャールズ (ごく自然に) おまえたちに飽きたからだ。

パトリック 飽きた？ 僕とジュディーに飽きたって？

チャールズ そうだ。おまえにもジュディーにも飽き飽きした。おまえたちも私に飽き飽きしてたんじゃないのかね？

パトリック それとこれとは別ですよ。父さんはなんたって父さんなんだから。

チャールズ どこが違うのかね？

パトリック 子供が親に飽きるのは、人間なら当り前なんじゃないですか？

チャールズ そうかね。

パトリック なんだって、世代が違うんだから。中年の人は僕らから見たら退屈ですよ。

チャールズ (微笑んで) 中年の人間も若い連中を退屈だと思ってる、ってことを考えたことはあるかな？

パトリック そんなこと有り得ませんよ。

チャールズ ところが、そうなんだな。

パトリック どうして？ 有り得ませんよ。

チャールズ そうかね？

パトリック どうして僕らが退屈なんですか？ 僕らは若さと高い理想を持つてる。いろんなアイデアで溢れてるんですよ。そう思うでしょ、母さん？

マージェリー ええ、勿論そうですよ。

パトリック 僕やジュディーが退屈だなんて、馬鹿げてる。僕らがいなくなったら、この家はどうなります？ まさに墓場です、霊廟ですよ。食卓に活気を与えてるのは僕らじゃないですか。そう

思うだろ、ジュディー？
ジュディー うん。

パトリック 誰にでも訊いてくださいよ、皆んな同じことを言うから。誰に訊いてもらったって、僕ら兄妹は並外れて頭の良い兄妹だって言ってくれる。もし父さんが僕らを退屈だっと思ふんなら、そりや頭が悪いからですよ。

マージェリー パット、それは酷すぎるわ。お父さんに向かってそんな言い方はないでしょう。

パトリック 父さんの方が仕掛けたんだ。それに、他にどんな言いようがあるっていうんです？

マージェリー それは……。

パトリック 父さんは恩知らずだ。

チャールズ なにもおまえが他の若い連中より退屈だと言っているわけではない。ただ、おまえのことはよく知っているから、そのぶん余計に退屈に感じるんだ。

パトリック でも、若いってことはそれだけで価値があるんじゃないんですか？ 父さんは頭が悪いから解らないんだ、——今の時代、唯一価値のあるものは若さですよ。それに、若さの価値を發見したのは僕らだ、だから僕らの世代は他の世代より優れてるんです。ジュディー、言ってること解るよな？

ジュディー うん、わかる。父さんが若かった頃は、若い人は早く大人になりたがった。

パトリック そのとおり。だけど僕らは違う。僕らは今この時を楽しみたいんだ。自分の若さを楽しみたいんだ。世界の歴史の中で僕らが初めて、若いってことがどんなに価値があるか気づいたんですよ。

マージェリー 若いって、そりやア素敵なことよ。

パトリック 僕らがいなくなったら、父さんや母さんの生活なんてまったく無意味なものになっちまう。考えてもみてください、僕らの生命力、僕らの爽やかさがこの家に活気を与えてるんです。だから、僕らが退屈な人間だなんて、とんでもない。正直、ジュディーのことを退屈だなんて言う奴は誰もいないと思いますよ。それに、自画自讚したいわけじゃないけど、ジュディーも僕について同じことを言ってくれると思いますね。なあ、ジュディー。

ジュディー うん。

チャールズ (愛想よく) おまえたちは考えたことがあるかね？——おまえたちの会話が私たち中年男にとってどんなに退屈か。ぺちやくちやぺちやくちや、ただ喋っているだけで、何の内容もない。自分の声を聞きたいだけなんじゃないのかとさえ思える。そのくせ、自分は極めて重大なことを話していると思ひ込んでいる。おまえたちは何にも分かつちやいない。口を閉じておくとう分別さえない。平凡極まりない、これ以上自明では有り得ないことを、まるで世紀の大発見でもしたかのようになが鳴り立てる。勿体ぶって、自己満足しきって、独善的で、内容は空っぽ。もし赦してやれるとしたら、若いから、ということが唯一の理由だ。私たちは、しょうがない、我慢しておまえたちと付き合っただけだ。おまえたちが面白いだっただけだ。とんでもない。途轍もなく退屈だよ。

ジュディーはくすくす笑いを抑えている。

パトリック ジュディー、止める。笑うようなことじゃないだろう。父さん、言っておきますがね、僕はこの家にいる時は、できるだけ陽気に、みんなを楽しませようと努めてきたんです。それがどんなに大変なことか誰も解つちやいないだろうけど、僕は最善を尽くしてきた。身を粉にして自分の義務を果たそうとしてきた。でも、それも今日が最後だ。もう飽き飽きした。うんざりだ。ジュディー けど父さん、父さんはあたしたちを愛してないの？

チャーلز そうだ。

マージェリー あなた、そんなことを！ 自分の子供を愛さない父親なんていないわ。

チャーلز この子らがまだ小さかった頃は、かなり好きだったと言ってもいいだろうが、大きくなつた今となつては、ほとんど興味ないね。

パトリック (憤慨して) そりやないでしょう。冷たすぎますよ。第一、自然の摂理に反する。

チャーلز そうかな？ 私はそうは思わない。小さい頃わが子を愛するのは自然だ。それは丁度仔犬や仔猫を可愛がるようなものだ。子供は小さい内は親に頼ってくれる。そりや嬉しいよ、感動するね。自分の親は素晴らしい人間だと信じている。そりや嬉しくなるさ、心をくすぐられる。しかし、いつの間にか大きくなって、自分自身の人格を持つようになる。そうなる子供は自己の一部ではなくなる。自分とは違う、独立した人間になる。よく解らない他人になるんだ。そんな人間をどうして愛さなくちゃいけないんだ。

パトリック じゃあ、父さんは、僕やジュディーはペットの仔犬程度の意味しか持つてないって言うんですか？

チャーلز そうではない。いいかい、仔犬が成長して、若くて逞しい犬になった時、親犬はどうする？ 仔犬から離れるだろう。私の気持はそれと同じだってことさ。

ジュディー でも、もしあたしたちが死んだら？ 父さん悲しむでしょ？

チャーلز 大いにね。まだおまえたちが小さかった時、病気になる、そりや心配したものだ。

あの頃は本当におまえたちを愛していた。おまえたちが至つて健康で、その愛情を注ぐ機会をなかなか与えてくれなかったのが恨めしいくらいだった。

パトリック 父親としての愛情を注がせてあげるために次から次へと病気に罹るつてわけにはいきませんからね。

チャーلز そのとおり。私は、おまえたちに健康な肉体を与えてやれたことを喜ぶべきなのだろう。パトリック 父さんは僕らを誇りにすべきだと思いますが……僕は成績は常に学年の五番以内だったし、寮長も務めた。クリケットチームのキャプテンで、ラグビーでもレギュラーだった。偏見のない人なら誰だって、自慢の息子だつて言うでしょう。

チャーلز なあ、パット、自分の息子を自慢するつてことは、本当は、自分自身を自慢してることなんだ。私にはそうした虚栄心はない。

パトリック いやアまいった。一本取られました。こりや僕の負けです。

チャーلز パット、おまえは私を愛しているか？

マージェリー もちろんですよ、あなた。こんなに愛情の深い子供たちはいませんわ。

チャーلز パット自身に答えてもらおうじゃないか。

パトリック 父さんが何を言いたいのかよく解りませんね。子供がごく自然に父親を愛するという意味では、当然、父さんのことが好きですよ。でも、父さんの生活が僕にとって理想の生活で、将来僕も父さんのようになりたい、とは思っていません。

チャールズ 多分、私が死んだら、おまえは少しは泣いてくれるだろうな、良い息子だから。しかし、申し訳ないが、私は健康そのもの。ぴんぴんしている。そんな私がおまえは邪魔でしょうがないんじゃないかな。私のところに小遣いを貰いに来なくちゃならない。私はそれを何に使うのか知りたがる。煩わしくて、腹立たしいんじゃないのかな？

パトリック 僕らくらいの年齢になれば、誰だって自分の自由になるお金が欲しいと思うんじゃないですか？

チャールズ ロンドンにマンションを持ちたいと思ったことは？

パトリック それとこれとどんな関係があるっていうんです？

チャールズ おまえがここでの生活を面白くないと思ってるってことさ。

パトリック でも、人生ってそんなものじゃないんですか？ それはどうしようもないことだ。

親が我が子を愛するのは当然だけど、子供がそれと同じように親を愛することは期待できない。

マージェリー パット！

パトリック アルフレッド小父さんに訊いてごらんさい。小父さんは世の中のものも分かってるから、自分がタイムやダイアナを愛してるのと同じくらい、二人も自分を愛してくれるだろうなんて、そんなこと期待してないと思いますよ。

アルフレッド 若大将、それは違いますぞ。我が家ほど強い絆で結ばれた家族は、この広いイギリス中どこを探したって無い、——小生、心中密かにそう思っていますのじゃ。しかし、まあ、それは育て方の違いかな。小生と我が愛妻ドロシーは子供たちと友達のような関係を築くよう、これ努めてきた。それ故、子供たちには我々をファースト・ネームで呼ばせるようにしてきた。結果、我が家の生活は愉快そのもの。お互い冗談を飛ばし合い、からかい合う。タイムとダイアナは小生をちよっぴり歳の離れた兄貴だと思っとる。小生の冗談に腹を抱えて笑い転げる。

パトリックとジュディーは視線を交わす。

チャールズ おまえたちのように知性があつて賢い子なら、私がいなくても充分上手くやっていけるだろう、私はそういう結論に達した。だから、その機会を与えてやろうと考えた。それに、そうすることは私にとつても都合が好い。

パトリック でも、僕らはどうやって暮らしていくんです？ ジュディーなんか、街で立ちん坊しなぐちやならなくなる。

ジュディー 兄さんは何にも分かってないんだね。男の子ってホントに無知なんだから。

パトリック だけど、もし父さんが一文も残してくれないで出たら、おまえにやれることは他にないじゃないか。

ジュディー 知らないの？——戦争が終わってから素人がどつと街に繰り出して、プロを追っ払っ

やったのよ。だから今じゃ売春なんかじゃロクな生活はできないの。
マージェリー ジュディー、何てことを！ あなたみたいな子供が！ ああ、一体世の中どうなってしまったの。

パトリック 僕はどうやってケンブリッジに行つて、法律の勉強をすればいいんです？

チャールズ おまえは今でもまだ国会議員になるつもりでいるのかな？——労働党の。

パトリック ええ、勿論それが最終的な目標ですよ。

チャールズ 労働党はおまえのような人間とは一線を画そうとし始めている、そうは考えないのかな。ただ選挙に有利だからと入党して、いいところだけ掻っ攫おうとしている連中のことだが。

パトリック 彼らは僕のような人間を必要としているんです。

チャールズ おまえは聖パウロについて考えたことはあるかね？ 職業は天幕作りだった。聖パウロ

はその仕事を通じて大いに名声を博した。

パトリック 父さん、止めてくださいよ。真面目な話をしてるんだ。宗教の話なんて持ち出さないでください。

チャールズ なあ、パット、一介の労働者として働くことが、将来のために大いに役立つと思うんだがな。機関車に石炭を焼べるとか、ゴミを回収するとか。

パトリック 僕が？

チャールズ そうすることで労働者階級の生活を内側から知ることができる。で、いよいよ候補者の地位を争う段になったら、イトンやオックスフォードの卒業生より優位に立っているというわ

けだ。違うかな？

アルフレッド チャーリー、馬鹿なこと言うな。子供たちがまさに世の中に出ていこうって時なんだぞ。今こそ親の手引きが必要じゃないか。見捨てるつもりか？

チャーリー いけないかね？ まあ、どうなるか、やってみれば判るさ。

アルフレッド 一文無しで？

チャールズ 一文無しってわけじゃない。それじゃ私だって、この不屈の精神を持ってしても、やっていけないだろう。

パトリック でも、何もかも失ったんだろう？

マージェリー お父さんのような仕事をしてる人はね、大抵どこかに少しは隠してあるものなのよ、債権者が手を出せないお金をね。

チャールズ 残念ながら私に隠し財産はない。今日まで私は何よりも名誉を重んじてきた。

パトリック じゃあ、やっぱり一文無しってことだ。

チャールズ 私は、負債を返済し会社を救うためだったら、持てるもの全てを手放しただろう。しかし私は除名された。会社はなくなり、これ以上弁済の必要もなくなった。で、たまたまニューヨークの銀行に二万ポンド相当の公債が残ったということさ。

パトリック えっ？

チャールズ 言っておかなくちゃならんが、名誉の問題としては、この金は債権者に渡すべき金だ。道徳的にはあの人たちに権利がある。

アルフレッド 残念ながら、私もそう思う。

チャールズ お聞きのように、我が社のお抱え弁護士もそう言っている。私もこの金を自分のためにとっておくのは疑いもなく紳士にあるまじき行為だと思う。しかし、今回はそうするつもりである。

アルフレッド チャーリー、そんなことはできんよ。

チャールズ 法的に？

アルフレッド 法律上は勿論できるが、しかし、……道徳的にはできんだろう。つまり、極めて恥ずべき行為だということだ。友達みんなから汚い奴だと言われるぞ。

チャールズ 言われて当然だね。しかし、酸いも甘いも噛み分けた、この中年男の脳味噌をギューギュー絞って考えた結果、その道徳的罪の意識ってやつが、私の食欲を妨げたり、睡眠の邪魔をすることはなかるうという結論に達したんだ。

ジュディーがくすくす笑い出す。

マージェリー ジュディー、笑うんじやありません。重大なことなのよ。お父さんの名譽が懸かっているんだから。

チャールズ 私の前には二つの途がある。崩壊を免れた二万ポンドが生み出す利子は年およそ一千ポンドだろう。それを独り占めすれば、私は儉しいながら楽に暮らしてゆける。が、それではあま

りに自分勝手だろう。

マージェリー 子供たちがかわいそう。ロンドンの街角で物乞いさせるわけにはいかないわ。

チャールズ 私にもそれなりの良心があるから、それでは完璧な幸福は手に入られないだろう。貧困の中で暮らしている妻と子の姿が時々心を掠めるようではね。

マージェリーが驚愕したような、狼狽えたような表情でチャールズを見る。

マージェリー でも、あなた……

チャールズ (彼女を遮って) もう一つの途は、二万ポンド全額をおまえたちに渡して、私は一人、着の身着の儘この家を出てゆくことだ。これはなかなかロマンチックで恰好がよろしい。しかし、私には馬鹿げているとしか思えない。そこで提案だが、おまえたちに一万五千ポンド残す。私は残りの五千ポンドを貰う。その利子でどうか私も飢え死せず済むだろう。

マージェリー でも、わたしは？……あなたと一緒に行くんでしょ？

チャールズ いや、君はここに残る。マージ、私の考えている生活は、君には退屈で退屈で、とても耐えられないと思うよ。

マージェリー あなたがそんなつもりだったなんて、考えもしなかった。

チャールズ そうかね？ 極めて明確に伝えていたつもりだが。

マージェリー 今の今まで判らなかつた。アルフレッド、あなた判つた？

アルフレッド 私に訊かんでくれ。自分がこの両足で立ってるのか、逆立ちしてるのかさえ判らないんだ。

マージェリー でも、わたしには理解できない。こんな馬鹿げた話、聞いたことないわ。そんな風に何でもないことのように別れ話を持ち出すなんて。言い争いも、喧嘩も、何にもなし。まるで運転手が、もつと良い仕事がしたいから辞めさせてくれって言ってるみたいじゃない。

チャールズ そうじゃない。古くからの家臣がお殿様に、自分も年老いたゆえ、老後をゆつくり過ごせるよう、お暇を頂戴したいと願っているんだ。

マージェリー 馬鹿々々しい。わたしや子供たちを置いていく理由がどこにあつて？

チャールズ 私は君の夫として、この子たちの父親として、もう充分務めを果たした。だから、その務めに喜びや何らかの良さが感じられなくなったなら、それを降りるべきだと思うんだ。

マージェリー わたしが退屈だつて言うの？

チャールズ ちよつとね。いや、そりゃ嘘だ。死ぬほど退屈だね。とことんうんざりしてる。

マージェリー 狂ってる。アルフレッド、この人、正気じゃない。

アルフレッド 実は私もそう考えてたんだ。なあ、チャーリー、今日の君は完全に狂ってるよ。

チャールズ もしそうなら自分で判ると思わないかい？

マージェリー 一番近くにおいて一番愛している人間にも判らないことってあるのね。ああ、まさかこの家に……、(電話の音が聞こえる。) あら、また？ うるさいわね。

チャールズ パット、電話に出てくれ。もし私にだったら、いないと言ってくれ。

パトリックは無言で出てゆく。

マージェリー わたしはあなたと一緒に行くものと思つてた。フランスかイタリアのどこかに落ちていて、ゴルフでも楽しみながら^{ほろ}しく暮らすんだろうって。

チャールズ マージ、君はそんな生活じゃ参つてしまふだろうよ。

マージェリー ええ、きつとそう。でも、わたしはあなたの妻ですもの。あなたの考えに従うのが義務だと思つてたの。それに、向こうで誰か好い方々とお知合いになれたかもしれないし。

チャールズ 君にそんな犠牲を払ってもらおうとは全然考えていない。

パトリックが入ってくる。

パトリック ターナーさんから。父さんはここにいるって伝えた。だから電話を切らずに待つてるよ。チャールズ くそ、なんてこった。

チャールズは急ぎ足で出てゆく。

マージェリー ああ、アルフレッド、どうしたらいいの？

アルフレッド そうだな、マージ、こうしよう。チャーリーと二人だけで話させてくれ。こうした事態にどう対処したら良いか、多少は心得てるつもりだ。私の経験からして、妻か夫かどちらかが何か取り返しのつかないことを言ってしまう前に、誰か友人が仲介役を買って出た方が良いと思う。

マージェリー わたし本当に吃驚仰天^{びつくりきょうてん}。まさか、あんな物静かだったチャーリーが、急にこんなこと言い出すなんて、わたし……

ジュデュー 母さん、小父さんが出てってほしいって言うんだから、早く出てかないと。

アルフレッド その方が良い。一体何がどうなってるのか、何とか探り出してみる。

マージェリー もしあの人^{ひと}がわたしを連れてくつもりだったんなら、わたしも言えたんだけど、「チャーリー、わたしはあなたの妻であると同時に、この子たちの母親なの。子供を置いていくわけにはいかないわ。だから、もうあなたにとってわたしは何の意味もない人間だと言うんなら、どうぞ出ていって」って。わたしたち友好的に別れられたかもしれない。でも、最初からわたしなんて必要ないって言うんなら、事情は全然違う。

アルフレッド よく解らんぬ。

マージェリー どうして？ 明らかじゃない。わたしはこんな風に扱われるつもりはこれっぽっちもありません。わたしにだって、女としての誇りがあるわ。

アルフレッド ああ、なるほど、そういうこと。そりや忘れてた。さあ、皆の衆、出てったり、出てたり。

マージェリー 分かった。

パトリック 父さんやっぱりおかしいよ。えっ、だって、僕らが退屈だつて？ そんなのまったく有り得ない。

マージェリー お医者さん^{いしやさん}を呼んだ方が良いかしら。(ジュデューに) その帽子取って。

ジュデュー (帽子を拾ってマージェリーに渡す。) はい。

マージェリー (帽子を胸に押しつけて) かわいそうに。何だか虐待されて死んでしまった赤ちゃんみたい。アルメニアのフォークソングを思い出す。

アルフレッド以外の三人は出てゆく。チャールズが戻ってくる。

チャールズ あれ、他の連中は？

アルフレッド 束にして追い出した。二人だけで話したいと思つてね。

チャールズ バーター・ターナーだった。

アルフレッド で、何だつて？

チャールズ (ちよつと笑つて) ウーン、あいつは善い奴だよ。仲間と協力して、今度の件を解決する金を集める、それで取引所に復帰できるようにしてやるつて言うんだ。

アルフレッド そりやアそりやア。

チャールズ なあ、イエス様は人間が良くお解りだった。酷い扱いに耐えるより、人の優しさに耐え

る方がよっぽど難しい。

アルフレッド (答えを聞きたくてしようがない様子で) で? 受け入れたんだな?

チャールズ いや。そんなことできるはずないだろう。しかし、恥ずかしながら感動しちまつてね、糞喰らえだつて言つて電話を切つてきた。ちよつと水臭かつたかな。

アルフレッド そんな馬鹿な。チャールズ、何でそんな馬鹿なことを。

チャールズ 君まで、そんなに苛めないでくれよ。いま気が滅入つてるんだ。

アルフレッド 苛めるつもりはないさ。さあ、腹を割つて話し合おうじゃないか。隠し事はなしだぞ。

それで? 何を企んでるんだ?

チャールズ (平静に戻つて) 企む? 何のこと?

アルフレッド (暖かく) しらばっくれるなよ。なあ、チャールズ、アルフレッド小父さんにみんな話しちやえつて。女がいるんだろう、えつ? 否定できるもんなら、してみなつて。

チャールズ じゃあ遠慮なくそうするよ。

アルフレッド そんな目眩ましをくれようつたつて、そうはいかん。このアルフレッド小父さんは何も昨日今日生まれかわけじゃないんだ。大切な会社もいらん、妻も家庭もいらんと言ふんだから、女がいるに決まつてる。そうじゃなかったら頭を丸めるよ。

チャールズ (愉快そうに) じゃあ丸めてくれ。

アルフレッド なあ、隠すなつて。友達だろう。俺は世の中が分かつた男だ。おまえさんも結婚して十九年、時には変化が欲しくなるもんさ。だから、カワイコチャンに入れ揚げたつて非難はしな

い。楽しみたきや楽しむさ。命短し恋せよ中年男。しかし理性を失つちやいかん。たかが女のために幸福な家庭を壊すことはない。分かるだろう?——幸福な家庭を捨てるに値するような女なんて、いないつて。止めとけ、止めとけ。

チャールズ アルフレッド小父さん、カワイコチャンのことなら小父さんの方がよっぽど御存知でしょう?

アルフレッド (悪戯っぽく) 仕事のお蔭でお知合いになる機会が多くてね。それに拙者も男でござる故。しかし、しかしでござる、我が殿中に立ち入らせたことは一度もござらぬぞ。

チャールズ でも、君、これまでにいたかい?——年二百五十ポンドの稼ぎしかない中年男と生涯を共にしたいなんて言うカワイコチャンが。

アルフレッド さつきマージェリーが、どこかに隠し金があるんじゃないかつて言つたが、ほんとは凶星だつたんじゃないの?

チャールズ 一銭もないね。

アルフレッド じゃあ本当に週五ポンドで暮らそうつて言うのか?

チャールズ それだけあればどうにか死なずに済むだろう。贅沢品の好い点は、一度持つてみれば、そんなもの無しでも暮らしていけるつて判ることだ。車を持つたことのない奴は、いつかは車を持つたいと、しょつちゆう心を悩ませていなくちゃならないが、私は二十年車を使つてきた、だからこれからは喜んでこの扁平足の足で歩き。しかし、もうこれ以上自分の時間を仕事に費やすのは真つ平だ。あんな仕事は、生きていくのに必要な金を稼ぐ以上の意味は持つていない。

アルフレッド 女と駆け落ちするんじゃないんなら、何のために家を出てくんだ？ 俺にはさっぱり解らん。

チャールズ 興味の湧かない連中のために退屈な仕事をして残りの人生を無駄にしたいくないんだ。独りで暮らしたいんだ。なあ、子供たちも大きくなった。もう私に頼らなくても生きていけるだろう。私は自分の義務は果たした。だから、これからは自分のために生きていきたいんだ。

アルフレッド 自分のためって？ 何をするつもりなんだ？

チャールズ まだ決めてない。これから考える。

アルフレッド 頭の片隅には何かあるんだろう？

チャールズ 人生は一回きりだ。戦争で死んだ連中のことを考えると、その一回きりの人生を何かもつと有意義なものにしたいと思うんだ。ただ株を売ったり買ったり、一財産儲けたり失くしたりの繰返しじゃなくってね。

アルフレッド なあ、チャールリー、そんな馬鹿々々しいこと言うなよ、女じゃあるまいし。近頃女どもが自分の人生を生きたいなんぞと言いだしてるが、俺はくだらんと思うね。しかしまあ、どうせ女の言うことだから、それはそれで我慢するとしてもだ、男が自分自身の人生を生きてみたいだど？ そんな話、誰が聞いたことある？ ないって。ない、ない。

チャールズ 男もすなるナントカを女もしてみんとてするなり、って言うだろう。たまにはその逆をしてやったら、女衆も喜ぶんじゃないかな。

アルフレッド 俺だつてたまには今の生活を変えてみたくなることはあるさ。ドロシーは掛替えのな

い女房だが、煩わしく感じることはないわけじゃない。なんたって所詮女だからな。月曜の朝、今日は仕事に行きたくないなって思うこともある。しかしそんな時は自分に言い聞かせるんだ、「アルフィーちゃん、そんなことでどうする、しっかりしろ。全ては君の両肩に懸かっているんだよ」ってな。

チャールズ で、その見返りに奥方には高く評価され、世間の連中からは尊敬の眼差しで見てもらえるってわけだ。

アルフレッド 皆んながおまえさんみたいになったら、社会はどうなる？ 人類の進歩、文明、その他諸々のものは存続できなくなっちゃうだろう。

チャールズ 大丈夫、大概の人間は揺籃ゆりかごから墓場まで、他の連中がつけた轍わだちの上を満足しきって歩いている。そうしたい奴にはそうさせておけばいいさ。別に責めやしない。責めやしないが、他の連中のやっていることをやっていたら良いつて考えは、愚かだと思っうね。

アルフレッド しかし、一時の衝動でこれまでの生き方をまったく変えちまったり、家庭を破壊しちまうつてのは、狂気の沙汰以外の何物でもない。このことについては、おまえさん、今日ほんの二、三時間考えただけじゃないか。

チャールズ 頭で考えたのは二、三時間だが、この胃袋では十二年間考えてきたんだ。

アルフレッド しかし、後悔するぞ。一生後悔するぞ。

チャールズ 危険は覚悟のうえさ。後悔するかもしれないって考えたら、誰が結婚なんかする？ 畢竟、人生、暗闇に向かって飛び込むことの連続なんじゃないのかね。

アルフレッド 幸せにはなれんぞ。

チャールズ そうかな？ 自分で言うのも何だが、私には色んなことの中に楽しみを見つけたる才能がある。性格は温厚だし、欲はほとんど無い。

ドロシーが庭に面した窓の外に現れ、内を覗く。

ドロシー お邪魔してごめんなさい。マージェリーがどんな様子か知りたがってるものだから。

チャールズ 内なかへどうぞ。アルフレッドとちよつと話をしたんだが、もう終わった。

アルフレッド マージェリーに頼まれて来たのかい？

ドロシー ええ。もうここへ戻ってもいいか知りたいって。

チャールズ 五分もあれば支度しだくは終わる。二階へ行つて、着替えて、バッグにちよつと荷物を詰めるだけだから。

ドロシー (仰天して) まさか、いま出てくんじやないでしょう？

チャールズ いや、いま出ていくよ。決心したらすぐ実行さ。そうしないのは時間の無駄だ。

アルフレッド しかし、チャールズ、今日というわけにはいかんだろう。

チャールズ どうして？ バッグを一つ詰めるだけだ。

アルフレッド 事務所の方はどうする？ 片付けなくちゃならんことが山とあるはずだ。

チャールズ 君に任せておけば大丈夫。アルフレッド、君ほど優秀な弁護士はいないよ。

アルフレッド しかし……、こんな風に逃げ出すのはおかしいだろう。つまり、奥方と喧嘩もしないで出てくなんて、モラルに反する。客のカーテンコールにはしっかり応えるのが役者の務めじゃないか。

チャールズ (陽気に) 私はそうは思わないね。楽屋口からそつと姿を消す方がずっとエレガントだと思ふよ。

チャールズはサツと出てゆく。

〔幕〕

第三場

幕が上がると、チャールズ、アルフレッド、ドロシーの姿がある。

アルフレッド　しかし、チャーリー、今日というわけにはいかんだろう。

チャールズ　どうして？　バッグを一つ詰めるだけだ。

アルフレッド　事務所の方はどうする？　片付けなくちやならんことが山とあるはずだ。

チャールズ　君に任せておけば大丈夫。アルフレッド、君ほど優秀な弁護士はいないよ。

アルフレッド　しかし……、こんな風に逃げ出すのはおかしいだろう。つまり、奥方と喧嘩もしない

で出てくなんて、モラルに反する。客のカーテンコールにはしっかり応えるのが役者の務めじゃないか。

チャールズ　（陽気に）私はそうは思わないね。楽屋口からそつと姿を消す方がずっとエレガントだ
と思うよ。

チャールズはサツと出てゆく。

ドロシー　ねえ、どうだった？

アルフレッド　人間性については充分解ってるつもりだ。きっと女がいるんだ。

ドロシー　（素早く視線をアルフレッドに送って）そのこと、チャーリーに言ってみた？

アルフレッド　ああ。しかしあいつは否定した。

ドロシー　（ちよつと笑みを浮かべて）でしようね。

アルフレッド　二人の仲は最近どうだったんだろう？——マージとのことだが。

ドロシー　あら、これまでと同じよ。マージは例によって趣味の世界で暮らしてるし、チャーリーは
一日中シティー。二人とも元々あんまり情熱的な人間じゃないでしょ。

アルフレッド　典型的な夫婦生活ってやつだな。べつにお互い不満はないわけだ。

ドロシー　そうね。

アルフレッド　あいつ最近誰かと遊んでなかったか？

ドロシー　聞いてないわね。

アルフレッド　マージに訊いてみてくれ。亭主が他の女と遊んでれば、大抵何か感じるもんだろう。

ドロシー　もしそうなら、きっとわたしに話してたと思うわ。わたしたち、お互い何でも話す仲なん
ですもの。

アルフレッド　男が何もかも捨てようって時には——仕事も家庭も何もかもだ——そういう時には何
か理由があるに違いないんだ。

ドロシー そりゃそうよ。冗談でこんなことする人なんていないわ。

アルフレッド 長年弁護士をやってるが、私の経験から言うと、男の関心は大抵の場合二つしかない。一つは金、もう一つは女だ。

ドロシー あら。あなたは世の中をよーく御存知ですものね。

アルフレッド そうさ。他に何かある？

ドロシー 何か精神的な問題ってことは？ 解る？——わたしの言ってること。

アルフレッド 勿論その可能性はある。精神的におかしくなってることは充分有り得る。

ドロシー そういうことじゃなくって、チャーリーは何か理想みたいなものを追っかけてるんじゃないかな
いかってこと。

アルフレッド 止せよ、ドロシー。そりゃ小説の読み過ぎだ。金融の世界で生きてる男が理想のため
に何かするなんて有り得ない。

ドロシー チャーリーは戦争以来普通とはちよつと違ってた。

アルフレッド こんな畜生。あいつはほんとにいい奴なんだ。こんな馬鹿なまねをするなんて、見ちゃ
いられない。

ドロシー どうしたらいいと思う？

アルフレッド 何かできるとしたら、マージしかない。ただマージはイマイチ頭が切れない。

ドロシー 自分を愛してない男に頭を使うのは結構難しいのよ。

アルフレッド しかし女房は女房だ。何かできるだろう。チャーリーはああ見えても、情に脆いところ

ろがあるから、女房が説得すれば気が変わらないとも限らない。

ドロシー 午後の五時って、感情に訴えるにはあまりいい時間じゃないと思うけど。

アルフレッド おまえも私みたいに離婚訴訟にたくさん関わってれば、そんなことは言わんさ。なあ、
おまえからマージに話してくれないか。私にはどうもやりにくいんだ。何とかおまえの力でその
気にさせてくれれば有難いんだが。

ドロシー いいわ。分かった。できるだけやってみる。

アルフレッド そう言ってくれると思ったよ。じゃア、マージを連れてくる。

アルフレッドは出てゆく。ダイアナが入ってくる。

ダイアナ ハイ、ドロシー。一人？

ドロシー 何か用？

ダイアナ チャーリー小父さんを捜してたんだけど。

ドロシー どうして？

ダイアナ さよならを言おうかなと思って。

ドロシー あなた、帰るの？

ダイアナ そうじゃない。小父さんこの家を出てくんでしょ？

ドロシー ダイアナ！ 向こうへ行ってなさい！ いま忙しいんだから。話すことがあったら、後で

話します。

マージェリーが足早に入ってくる。マージェリーの最初の言葉と同時にダイアナは出てゆく。

マージェリー 何か話があるってアルフレッドが言ってたけど。

ドロシー あの人の考えじゃ、あなたがチャーリーと話す前にわたしと話しておいた方が良さいだろうって。

マージェリー チャーリーはどこ？

ドロシー 二階よ。いま荷物をまとめてる。

マージェリー (呆気にとられて) 荷物を？ 本当に出てくつもりなの？

ドロシー どうもそのようね。

マージェリー 今日？

ドロシー 今。

マージェリー (息をのんで) ああ、本気だなんて思いもしなかった。ちよつとヒステリックになって、みんなと喧嘩したいだけなんだろうって。

ドロシー マージ、悲観し過ぎちゃ駄目。チャーリーは必ず戻ってくるから。

マージェリー 何のために？ 仕事はもうないのよ。ああ、わたしたち、これからどうやって生きていけばいいの？

ドロシー 何か変だなんて思ったことない？

マージェリー 仕事のこと？ いいえ。あの人、仕事のことは何も話さないの。わたしが嫌いだって分かってるから。

ドロシー そうじゃなくって、家の中のことで。

マージェリー 変わったことは何もなかったと思う。わたし、あの人のことにはほとんど関心がないのよ。どうして関心を持たなくちゃいけないの？

ドロシー それはそうよね。

マージェリー あの人、勝手よ！ 自分勝手もいいとこだわ。お金を失くしたんなら、一生懸命働いて前以上に稼ぐのが男の務めじゃない。

ドロシー 誰かあなた以外の人を愛してるんじゃないかって、そう思ったことない？

マージェリー あら、そんなことないはずよ。もしそうなら、すぐ気がついたはずだもの。それに、わたしその点ではあの人望むものは全て与えてると思うし……。

ドロシー でも、充分じゃなかったってことはないかしら。

マージェリー わたしたち、とっても良い友達だったと思う。お互いに干渉することもないし。もしこう言ってよければ、わたしたちの結婚は理想的なものだったわ。

ドロシー 男って変なところがあるのよ。男が何を望んでるのか、本当のところはよく解らないんじゃない？ あの人たち自身にも、よく解ってないのかもしれない。

マージェリー どういうこと？ 何が言いたいのか？

ドロシー わたしいつも思ってたんだけど、チャーリーは何か違うものを求めているのかもしれない。
マージェリー 違うものって？ 何のことか分からない。わたし、自分は妻として完璧だったと思っ
てるわ。

ドロシー ひよっとしたら、あなたはチャーリーの生活に十分な美しさを与えてなかったのかもしれない。
ない。

マージェリー ドロシー、どうしてそんな酷いこと言うの？ わたしがこんなに困ってるっていうの
に。わたしはあの人を美しいもので包んできた。なのに、そんなこと言うなんて。酷い！ 美し
く生きるってことがわたしにとってどんなに大切か、皆んな知ってる。絵だとか、本だとか、音
楽だとか、そうしたものがわたしにとってどんなに大きな意味を持つてるか。…：チェコスロヴ
アキアの民芸品展、あれはわたしが計画したのよ。まさに美の展覧会だったじゃない。それにア
ルメニアのフォークソング。わたしがその美しさを発見するまで、誰も聴こうとしなかったじゃ
ない。わたしほど美しいものに敏感な人間はいないわ。わたしは美しいものに夢中なのよ。実際、
このゴールドダズグリーンを美しいところにしたのはわたしだと言っても言い過ぎじゃない。な
のに…。

ドロシー (宥めるように) ごめん、マージ。本当にごめんなさい。あなたを傷つけようなんて気は
全然なかった、分かって。

マージェリー わたしは馬鹿かもしれないけど、でも、もしわたしにも解るものが一つあるとすれば、
それは美よ。

ドロシー あなたからはいろいろ教わった。

マージェリー チャーリーの欠点はユーモアのセンスがないってこと。でもそれはわたしにはどうす
ることもできない。でしょ？

ドロシー アルフレッドのを少し分けてあげられたらいいんだけど。あの人にはありすぎるもの。

マージェリー 人生ってうまくいかないわね。

ドロシー アルフレッドが、いま何かできる人はあなたしかいないって言うの。

マージェリー ドロシー、わたし今、怖ろしい立場に立たされてる。世間の人があんなに意地悪か、
知ってるでしょ？ もし女の方が家を出てけば、それは夫が非道かっただってことになるけ
ど、夫に捨てられた女は、夫を繋ぎ止めておく魅力がなかったんだって言われる。屈辱だわ。耐
えられない屈辱。

ドロシー マージ、あなたチャーリーになんて言うつもり？

マージェリー あの人の良心に訴えるしかないでしょう。何だかんだ言っても、あの子は道理を弁
た人だから、子供たちが世の中に出てこうとする時には、これまで以上に父親の助けが必要だっ
てことは解ってると思うの。だから、きつと、いま子供たちを見捨てるわけにはいかないってこ
とも。

ドロシー ねえ、マージ、男には道理なんて通じないのよ。女とは違うの。そのくらい分かっていると
思ってたのに。男を動かすには感情に訴えるしかない。男って本当は気が弱くて、おセンチで、
そこがこっちの付け目。わたしがあなたの立場だったら、うんと哀れっぽく攻めるわね。あの人

にしがみついて、子供のよう泣く。

マージェリー 知ってるでしょ？——わたし、泣きたい時に泣けた例がない、具合が悪いことに。それに安っぽいお涙頂戴物は嫌いな。

ドロシー でも今はそんなこと言ってる場合じゃないでしょ。間違いなく効き目のあるのはそれしかないんだから。ねえ、マージ、あの人を煽てるの。そつと、優しく、愛情を込めて。ああ、わたしの頭の中じゃ、もう台本が出来上がってるんだけど。

マージェリー 二十年前ならできたかもしれないけど、もう無理よ。あの人笑うに決まってる。

ドロシー じゃあ、また最初に戻っちゃったってことね。ユーモアのセンスのない人を扱うのって、ほんとに大変。

マージェリー ねえ、先にあなたがチャーリーと会ってくれたらって思うんだけど。あなたの方が楽に言えると思うの。

ドロシー でも、あなたに代わってそつと優しくってわけにはいかないわ。それはあなたがやるべきことよ。

マージェリー 分かってる。でも、お膳立てくらいならできるでしょ？ つまり、わたしが内気で、上手く感情を表せないってことを解らせておいてほしいの。あの人を深く愛してるってことも。

ドロシー まあ、それくらいなら……。

マージェリー 多分あなたの言うとおりにね。わたしこれまであの人を充分煽ってあげなかった。男が虚栄心の塊だってことをついつい忘れちゃうのよ。

ドロシー 絶対忘れちゃ駄目。そこが肝心要なんだから。いいわ、できるだけやってみる。チャーリーを呼ぶけど、いい？

マージェリー ドロシー、あなたってほんとに善い人だわ。わたし、庭にいる。

マージェリーはフランス窓を通って出てゆく。ドロシーはドアに向かい、それを開けると暫し舞台から消える。その間にダイアナが滑り込むように部屋に入り、忍び足で部屋を横切るが、母の声を耳にすると、また忍び足で出てゆく。

ドロシー (ドアの外で) チャーリー！ チャーリー！ 下りてきてくださらない？ お話したいことがあるの。

ドロシーが再び部屋に戻ってくる。彼女は白粉を取り出して顔を叩き、口紅を塗る。ドアが開いて、チャールズが入ってくる。彼は普通の背広に着替えている。

チャールズ 何か？

ドロシー (厳肅に、まるで遺体を前に話しているかのように) マージェリーと話しました。

チャールズ そう？

ドロシー あの人、とても悲しんでいます。

チャールズ (冷静に) 腹を立てて苛立っているだけさ。悲しんでるわけじゃない。
ドロシー あなたには分からないのよ

チャールズ 十九年も一緒に暮らしてきた？ 馬鹿言わんでくれ。私はマージェリーのことは全て解
ってる、——人間にもし他人のことが解るとしたら、だがね。

ドロシー あの人、内気なんです。

チャールズ それに粘液質で冷淡だ。

ドロシー チャーリー、何て酷いことを。

チャールズ ちっとも酷くないさ。妻にあつては好ましくない性質というわけじゃない。家の中が静
かで好いよ。

ドロシー マージェリーがあなたをどんなに愛しているか、分かってて？

チャールズ まさか私にぞつこんだなんて言うんじゃないだろうね？

ドロシー まさかじゃなくて、まさにそのつもりです。崇めていっていいくらいです。

チャールズ またくだらんことを。君だつてよく分かつてるはずだろ？ あいつは私のことなんかこ
れっぽっちも気に掛けてない。

ドロシー そんなことありません。愛しています。ねえ、あなたは今とても重大な一歩を踏み出そう
としているのよ。

チャールズ (少し口調を変えて) 私も事の重大さは承知している。でも、なあ、ドロシー、君が何
て言おうと気は変わらない。言うだけ無駄、時間の無駄だね。

ドロシー でも、やれるだけのことはやっておきたいの。さもないと、一生自分を赦せなくなつてし
まう。

チャールズ こんな言い方をして申し訳ないが、一体、君とどんな関係があるつて言うんだい？

ドロシー (少し躊躇いを見せて) それは、……あなたが何故出てゆくのか、その理由を知っている
から。

チャールズ 知つても別に驚かないな。マージェリーとアルフレッドに懇切丁寧に説明したんだか
ら。

ドロシー あの、自由になりたいとか、証券会社に飽き飽きしたとかいう話？ そんなものわたしが
信じていると思う？

チャールズ 信じようが信じまいが、本当なんだからしようがない。

ドロシー (優しく) あなた、わたしの顔には目が付いていないと思つて？

チャールズ とても魅力的なやつが二つも付いてますよ。その使い方も充分に心得ていらつしやる。
しかし、それとこれとどんな関係があるつて言うのかね。

ドロシー (少女のように悪戯っぽく) ねえ、わたしなんでしよう？

チャールズ (驚いて) 君？

ドロシー (事故満足げに) そうだと思つた。

チャールズ 何が？

ドロシー わたしが気がつかないと思つて？——あなたがわたしを見る時のあの目、このあいだの晩、

キスしたこと憶えてる？

チャールズ どの晩のことかな。君とはしょっちゅうキスしてるから。

ドロシー あなたはいつもと同じつもりだったかもしれないけど、本当はそうじゃなかった。わたし
ピンときたの。あなたは女としてのわたしにキスしてた。

チャールズ そんなつもりは全くなかったな。

ドロシー でしょうね。でも、だからこそ本心が出たのよ。

チャールズ なあ、ドロシー、……

ドロシー (チャールズの言葉を遮って) 止めて、お願い。今は止めて。何も言わないで。わたしに
言わせて。あなたが何を言いたいのか、よく分かっている。でも、わたしにはアルフレッドがい
るの。あの人はあなたの昔からの友達よ。それに、マージもいる。マージとわたしは従姉妹同士
それに子供たちも。あなたの子供たち、わたしの子供たち。ああ、無理よ。無理なのよ。あなた
が悲歎に暮れてるのは分かった。胸が張り裂けそうだったわ。ああ、チャーリー、言ってくれ
なくてもいいの。わたし全部分かっている。

チャールズ なあ、ドロシー、私はちよつと困った立場に置かれてるみたいなんだが。

ドロシー (自分の言葉に酔って、自分の言っていることは全て真実であると思ひ込んで) じゃあ、
あなたは？——あなたはわたしを困った立場に置いてないって言うの？ わたしがこれまでずつ
とどんな風感じていたと思って？ わたしは棒切れでも石ころでもない。あなたの悲しそうな
眼差しがわたしに注がれているのを、ただ座って眺めていたと思う？ わたし、魂の奥の奥まで

揺さぶられていた。マージェリーがあなたのことを理解していないのはよく分かっている。ああ、
チャーリー、あなた。どんなに申し訳ないと思っていたことか。でも……、でも、どうしようも
ないのよ。わたしたちに何ができて？

チャールズ もうちよつと小さな声で話すことはできるだろう。

ドロシー まあ、何て冷たいの！ それに、どうせここには誰もいないわ。

チャーリー しかし、実際問題、何故そんなことを言うんだね？

ドロシー 分からない？

チャーリー まるっきり。

ドロシー チャーリー！ わたしをそんなお馬鹿だと思ってたなんて。わたしには分かっているの、—
—あなたがわたしを愛してるってこと。

チャーリー また、どうして？

ドロシー 直感よ。こういうことが女に分からないと思つて？

チャーリー ああ、そういうこと。

ドロシー (全てが真実であると自らを説き伏せるように) わたし、あなたの手がわたしの手に触れ
る時、顔が欲望に蒼褪めるのを見た。言いたいことを抑えるために唇を噛んでるのを見た。勿論
あなたは何も言わなかった、立派な人だから。どんなに立派な人か、分かっていたと思つ
て？ ……でもこの最後の瞬間、もうそんなことは問題じゃない。本当は全部分かっていた、その
ことを知らせずあなたを行かせるわけにはいかない。お願い、もしかしたらわたしもあなたを

愛しているんじゃないか、なんて訊かないで。お願い。お願い。

チャーリー そんなこと、考えたこともないね。

ドロシー そう？ ねえ、お願いだから、これ以上言わせないで。あなたが出ていくと聞いた時、すぐにピンときた、——わたしのためなんだって。わたしはどうしたらいいのって、ひとり、涙を流したわ。わたしのためにそんな犠牲を払わせるなんて、耐えられない。わたし耐えられない。

チャーリー ねえ、君、ちよつと時間が経てば、他人が自分のために払ってくれる犠牲に耐えるのなんて何でもないって解るよ。

ドロシー わたしはそれに耐えていかなくちやならない。でも何て辛いもの。あなたには分らないでしょうね。ああ、もしわたしに勇気があったら……、何もかも捨ててあなたに従って行くでしょう。でも従ってきけてくれないで。チャーリー、お願い、その気にさせないで。

チャーリー 大丈夫。その気にさせないから。

ドロシー ああ、あなたってやっぱいい人だわ。自分を偽ってもしようがないと思うの。わたしには勇気がないのよ。何だかんだ言っても、わたしにはわたしを愛してくれる夫がいる。わたしの残した足跡さえ大切にしてくれる子供たちがいる。それにこのゴールドダーズガーデンのためにやらずにちやならないこともいっぱいあるわ。自分が弱い人間だということは分かってる。あなたが軽蔑するだろうってことも分かってる。でも、いつの日かあなたの心の片隅にわたしの居場所が生まれるだろう、ちよつとびり哀れみを持って思い出してくれるだろうってことも。

チャーリー 君はアルフレッドと幸せに暮らすさ。

ドロシー 幸せ？ 幸せ？ 誰が幸せだって言うの？ ああ、人生ってなんて悲しいの。

チャーリーズ そうばかりでもないさ。人生、楽しい時だって結構ある。ただし、樂觀的になりすぎないように注意すればだね。

ドロシー ああ、なんて苦い人生観なの。チャーリー、あなたわたしにがっかりしたでしょうね。でも、しょうがないの。駆落ちするわけにはいかないわ。だって、分別を持って考えてみて、——わたしたちどうやって暮らしていくの？ あなた週に五ポンドしか使えないってホント？

チャーリーズ ホントにホントだよ。

ドロシー それじゃしょうがないわ。わたしのこと、冷たい女だ、俗っぽい女だって考えてほしくないけど、でも、こんなこと言うのは、結局はその方が親切だって思うからなの。週に五ポンドじゃ愛は続かないわ。そんな試練を女に課するのは罪よ。ねえ、分かってくれるでしょ？

チャーリーズ よく分かるよ。

ドロシー もしスイスの銀行に十万ポンド隠してあるって言うんなら、話は別なんだけど。

チャーリーズ まったくそのとおり。

ドロシー わたし皮肉屋さんじゃないのよ。一人の女に過ぎないの。だから、お金つてものがどんな意味を持つてるのか、よく分かってるの。

チャーリーズ 女性の持つ喜ばしい特質の一つだね。

ドロシー ねえ、チャーリー、悪く思わないでね。それでなくても辛いのに、あなたに悪く思われたら、なおさら辛い。

チャールズ 君の言うとおりでと思うよ。

ドロシー わたし間違つてないと思う。今のこの気持をあなたに理解してもらえない時が、いつかきつと来る。もしかしたら、何年かして、パリかどこかでばったり出会うかもしれない。そんなことはないって誰に言えて？ でも、わたしのことなんかすっかり忘れてるかもしれない。

チャールズ それはないさ。

ドロシー その時ひよつとしたら、ひよつとしたらわたし、あなたにこう言うかもしれない、「わたしはどんなに苦しんだかは、神様だけが御存知です。わたしが最善を尽くそうとしたことも。でも人間には限界があるの」って。それに、もしかしたら、「チャーリー、わたしたちはもう充分に待ったわ。わたしたちに残された時間は少ない。だから、不思議な縁でこうしてまた巡り会えたその幸せを素直に受け容れましょう」って。

チャールズ さて、もしよかったら、二階へ行つて荷造りを済ませたいんだが。

ドロシー あなたをこのまま行かせるわけにはいかない、わたしを思い出してもらえるようなものを何もあげずに……。チャーリー、キスして、唇に。

チャールズは誰かがドアか或いはフランス窓から入ってくるのではないかと、困惑の様子で部屋を見廻し、それからドロシーの唇にキスをする。彼女は両腕をチャールズの首に廻す。彼はその手首を持ち、ゆつくりと彼女の腕を離す。

ドロシー チャーリー、わたしはあなたにこの肉体以上のものをあげた。魂をあげたの。さようなら、あなた。さようなら、永遠に。

彼女は英雄的決意を持って感情を抑え、足早にフランス窓から出てゆく。チャールズはその後ろ姿を眺め、苦笑いしながら暫しの間立っている。次にカラーがきつすぎることに気づいたようにそれを緩めると、苦笑いを浮かべたまま、二階へ向かうべくドアに近づく。ノブに手を掛けようとした時、ドアが開く。ダイアナが入ってきて彼の足を踏みつけそうになる。チャールズは驚く。

チャールズ 吃驚した。そこで何してたんだい？

ダイアナ べつに。ただぶらぶらしてて……。母さんが出てくのを待ってた。話したいことがあるんだ。

チャールズ どうぞ。

ダイアナ 母さん小父さんを誘惑してたんでしょ。

チャールズ もうそんな歳じゃないさ。

ダイアナ 小父さんが出てくのは自分のためだと思ってるんでしょ。

チャールズ 盗み聞きしてたのか。感心しないな。

ダイアナ ねえ、そんなに怒らないで。盗み聞きしなかったって、母さんが何を言ったかぐらい想像つ

くもん。

チャールズ テレバシーってやつか。仲の良すぎる家族に時々見られる弊害の一つだな。

ダイアナ 女は母さんぐらいの歳になると、知合いの男はみんな自分に恋するものだって思い始める。困ったことだよ。それで時間を守らなくなる。

チャールズ えっ？

ダイアナ やたらお化粧に時間を掛けるようになるんだよ。「ああ、どうしよう。今日はひどい顔だわ」なんて言って、最初から遣り直し。何度も何度も遣り直して、結局、どうやったって同なじなんだって気がついた時は、みんな待ちくたびれてるってわけ。

チャールズ なあ、ダイアナ、まだ荷物の整理が残ってるね……。私に言いたいことって？

ダイアナ 小父さんはこういうたわいもないお喋り、嫌い？

チャールズ たわいもない？ 君はお母さんを辛辣しんらつに批評しているのかと思った。

ダイアナ えっ？ あたしは母さんが大好きだよ。ただ、気の毒なんだ。ねえ、哀れじゃない？――

男は皆んな自分を誘惑するものだと思っ込んでる。しかも、そんな男たちに感謝してるなんて。

チャールズ お母さんに同情してあげるとは、さすが、君は良い子だ。さあ、もう行かないと。じゃあ、さよなら。楽しい話だった。

ダイアナ ねえ、まだ始まってもないんだよ。あたし、この一時間ずっと小父さんと二人きりになれるのを待ってたんだ。

チャールズ 私が今日この家を出ていくことは知ってるんだらう？

ダイアナ うん、知ってる。それで、あたしも一緒に連れてって欲しくないかなって……。

チャールズ 何のために？

ダイアナ 旅の道連れ。

チャールズ 有難い申し出だが、一人で充分やっていけると思うよ。

ダイアナ でも、一人じゃ淋しくない？

チャールズ 結婚して十九年も経つと、孤独には慣れるんだ。

ダイアナ 妻とそうじゃない女とじゃ違うでしょ？

チャールズ そりゃそうだが、なおさら煩わしいね。

ダイアナ あたし、自分の面倒は自分で見られる。小父さんの邪魔にはならないよ。

チャールズ しかし一体またどうしてそんなことを思いついたんだい？

ダイアナ ここにいると退屈なの。あたし、もう十八だよ。時間はどんどん経ってく。なのにこれと違ったことは何にもしてない。あたし、世の中に出て何かしてみたいんだ。

チャールズ そりゃ結構なことだが、その冒険の相棒として、女房持ちの中年男というのはどんなものかな。

ダイアナ 何故いけないの？

チャールズ いいかい、私は君より遥かに年上だが、しかし、世間の人たちは私たちを親子だと信じてくれるかな？

ダイアナ あたしだって馬鹿じゃないから、そんなこと分かっている。当然あたしは小父さんの愛人に

なるんだよ。

チャールズ あ、そういうこと。それは考えなかった。

ダイアナ 小父さんバツカじゃない？

チャールズ 正直言つて、愛人は欲しくないんだ。

ダイアナ どうして？ まだそんな歳じゃないでしょ？

チャールズ 私はどんな人間関係も一時的なものであってほしいと願ってるんだ。

ダイアナ あたしに飽きたら、いつでも捨ててくれていいよ。

チャールズ 女は一度くつくとなかなか離れようとしらないものだ。

ダイアナ あたしって魅力ない？

チャールズ とっても魅力的だよ。

ダイアナ それにあたし、まだヴァージンだよ。

チャールズ そうだろうと思った。

ダイアナ (ちよつと傷ついたように) べつに理由はないんだよ。ただそうなっちゃった。あたしくらいの歳の子は大抵もう経験してるのに。

チャールズ 結婚前の女の子としては願わしいことだと思うがね。

ダイアナ それは中年の考えだよ。

チャールズ 私は中年だが……。

ダイアナ タイムもそう。

チャールズ 中年みたい？

ダイアナ そうじゃなくって、ヴァージンなの。でも、男の子がヴァージンだっていうのはちよつと

素敵じゃない？

チャールズ あまり関心はないね。

ダイアナ ポテパルの妻の話って知ってる？——ヨセフを誘惑した奥さんの話。タイムったら、ポテ

パルの奥さんみたいな人が現れるのを待つつもりなんだって。自分がヴァージンだって知ったら、

その奥さん、さぞ吃驚するだろう、喜ぶだろうって。

チャールズ 逆かもしれないよ。無智であることは理屈の上では魅力的かもしれないが、実際は経験

がものをいうことだつて大いにある。

ダイアナ ねえ、連れてつてくれるでしょ？

チャールズ 無理だね。

ダイアナ 心配しなくたっていいんだよ。あたし、どんなことが待ってるかちゃんと分かったうえで

付いてくんだから、両目をパツチリ開けてね。

チャールズ 私が考えてるのは君のことじゃない。自分のことを考えてるんだ。フライパンから飛び

出したらそこは火の海だったなんて、洒落にもならんだろう。

ダイアナ 素敵な人生が待ってると思うんだけど？

チャールズ 違うね。私は一文無しだ。週に五ポンドじゃ愛は保たないよ。

ダイアナ なんだか母さんみたい。小父さん、母さんに一緒に来てくれて頼んでたんじゃない？

チャールズ いいや。

ダイアナ 神様にかけて？

チャールズ 神様にかけて。

ダイアナ じゃ、信じてあげる。あたし、お金のことも考えたんだ。小父さんは、女に養ってもらってことに変な偏見は持っていないよね。

チャールズ 全然。将来の進んだ社会では、当り前のことになってるさ。優れた能力と勤勉さを兼ね備えた女性たちが、朝焼けと共に目を覚まして、霜の降りる夜更けまで一心不乱に働いてくれる。で、男たちはやれ美術だ、やれ文学だ、あるいは、そんなに疲れないですむスポーツなんかに現を抜かしていればいい、そんな時代がやって来るさ。

ダイアナ 止めてよ、馬鹿なこと言わないで。ねえ、あたしの考え聞いて。あたしダンスが得意なんだ、知ってるでしょ？ みんな、とつても上手だって言ってくれる。だからすぐ舞台に立ると思うんだ。で、あたし、フランスかイタリアのカジノと契約するの。

チャールズ しかし踊り子じゃ大して稼げないだろう？ 私はどうせヒモになるんなら、豪勢に暮らしたい、そうかねがね公言してるんだ。

ダイアナ 踊りだけじゃお金にならない、それはそう。でも待って。そこなんだよね。そこでカジノと契約するってことが意味を持つわけ。カジノにはお金持がたくさん出入りするでしょ。だから、誰かあたしを可愛いなって思ってお金持がいたら、誘惑するの。そうしておいて、さあ、いざって時に小父さんがいきなり入ってきて、「俺の娘に何するんだ！」って言うわけ。ねっ、分かるで

しよ？

チャールズ 分かるけど、そりゃ映画の中だけの話だよ。現実には刑務所行きだ。無理だね。私はそんなに肝っ玉は太くない。

ダイアナ どうしても駄目？

チャールズ 駄目だね。(ダイアナは深く溜息を吐く。) さあさあ、ダイアナ、溜息なんて吐かないで。

ダイアナ ホントにがっかり。

チャールズ 私に付いて来たって、一月もたてばうんざりするだけさ。そうならどうするつもりだったのかな？

ダイアナ 小父さんのところから出てこうと思えばいつでもできるもん。なにもこの世に男は小父さんだけってわけじゃないし……。あたしだって、永久に続くなんて考えてないよ。でも、それまでは結構素敵な生活ができるんじゃないかなって。

チャールズ 私が君だったら、誰か若くて自分に相応しい男が現れるのを待つね。そしてその男と結婚する。なに、この人だ”って必ず感じるものだよ。

ダイアナ 小父さんがなぜ渋るのか分かんない。お買い得だと思っただけ。

チャールズ 君が？ 申し訳ないが、買う気はないね。

ダイアナ 道徳的に躊躇ってるの？ そう？

チャールズ まさか君だって、学校を卒業したばかりの、しかも昔からの友達の娘と駆け落ちするこ

とが善いことだとは思わないだろう？

ダイアナ でも、女はみんな誰かの娘だよ。それにどうせ駆落ちするんなら、鬼婆みたいな女より若い娘の方が好いでしよう？

チャールズ まあ、ずっと好いだろうな。

ダイアナ 人間として恥ずかしいことだからとか何とか、そんな風に考えて連れてってくれないんなら、あたし、むかつく。そんなのくだんない。中産階級の考えだよ。

チャールズ そう思うかね。

ダイアナ そうだよ。もしそうだったら、あたし赦せない。

チャールズ すまんね。

ダイアナ でも、もしあたしに性的魅力を感じないって言うんなら、それならちっともかまわない。

勿論あたしにとっては惨めなことだよ。でも、そういうことはどうしようもないことだもん。辛いけど我慢する。そうなの？

チャールズ ねえ、ダイアナ、こうしたことは男の口から——たとえ中年男の口からだとしても——

十八の女の子に対して言うべきことじゃないが、……

ダイアナ 止めて！ そんな！ まさか小父さんが……。

彼女は啜り泣きを洩らす。

チャールズ おいおい、どうしたんだ。泣いてるんじゃないだろうな。一体全体何を泣いてるんだ。

ダイアナ 小父さん、あたし心から小父さんを愛してるの。

チャールズ (驚いて) 私を？ そんなこと、これまで一言も言わなかったじゃないか。

ダイアナ 感情に訴えたくなかったの。最後までビジネスライクでいきたかったの。でも本当は、わたし小父さんに夢中なの。

チャールズ (腹を立てて) この馬鹿娘が！ 何をつまらんことを言ってるんだ！

ダイアナ つまんなくない。あたし小父さんをすっごく愛してるの。

チャールズ 止してくれ。そんなくだらんことは聞きたくもない。

ダイアナ でも、どうしようもないの。

チャールズ どうしようもある。君は馬鹿で頓馬で泣き虫の、ヒステリー娘だ。君に必要なのは尻叩きの罰だ。くそ、何てこった。急いでなけりや實際尻を引叩いてやるところだ。

ダイアナ (涙の中で微笑みながら) 小父さんって素敵。分かってる？

チャールズ やれやれ、まいった。(調子を変えて、笑いながら) ねえ、ダイアナ、そんなお馬鹿なまねは止しなさいって。私のような可笑しな老人に恋するなんて。自分を恥ずかしいとは思わないのかい？

ダイアナ 思わない。どうしようもないもん。小父さんに首っ丈。とつても素敵だよ。

チャールズ どうして？

ダイアナ だって、ユーモアのセンスがないもん。

チャールズ ユーモアのセンスがないから私に恋した、まさかそう言うんじゃないだろうね。

ダイアナ そう言ってるの。ああ大好き。小父さんだって、自分にユーモアのセンスがないことは分かっているよね？

チャールズ 正直、今の今まで知らなかった。

ダイアナ 元々ない人にはないってことが分かんないんだよね。面白いと思わない？——あたしの父さんや母さんには厭いやってほどあるの、時々耐えられなくなるほど。でも小父さんにはない。だから好きなんだよ。ね、分かるでしょ？

チャールズ よーくね。しかし、自分が間違ってたってことが判った時にはもう手遅れだったってことになったら、遣り切れないだろう。

ダイアナ どういうこと？

チャールズ つまり、私が冗談を言ったら、私たちの幸福は滅茶々々になってしまおうってこと。

ダイアナ (優しく) 大丈夫だよ。多分あたし冗談だって分かんないから。ユーモアのセンスがない人が冗談言っても気がつかないことって多いんだよ。

チャールズ しかし、危険は冒さないにこしたことはない。

ダイアナ ねえ、一度だけキスして、お願い。

チャールズ いいとも。キスしたらすぐ荷造りに戻る。

彼はダイアナに近づき、腕を廻そうとする。ダイアナはチャールズの唇をじつと眺め、それ

を人差指で触ると、その匂いを嗅ぐ。

ダイアナ 母さん何故もつとマシな口紅を使わないのかなア。ねえ、唇を拭いて。

彼女はチャールリーの背広のポケットからハンカチを取り出すと、彼の唇を拭く。そして首に腕を廻して唇を近づける。しかしチャールズは彼女の顔を両手で挟むと、優しく片方の頬に、続いてもう片方の頬にキスをする。彼が手を離すと、ダイアナは溜息を吐く。

ダイアナ 櫛くし貸して。

チャールズ 櫛？ 櫛なんて持ってないよ。

ダイアナ じゃあ、どつかへ出かけた時、髪を梳とかしたいなって思ったらどうするの？ 知合いの男

の子はみんな持つてるよ。ねえ、小父さんに教えてあげられることがいっぱいあったのに。

チャールズ (腕時計を見ながら) パットとジュディーはどこにいるのかな。

ダイアナ ジュディーなら庭。パットは知らない。

チャールズは窓のところへ行って、声をあげる。

チャールズ ジュディー！ (ダイアナに) よかったらマージェリーを呼んできてくれないかな。

ダイアナ うん、分かった。あたし怒られても気にしないからもう一度言うけど、小父さんってホントに魅力的だよ。素敵。
チャールズ 勝手にしろだ。

ダイアナがドアから出てゆくと、ジュディーがフランス窓から入ってくる。

ジュディー 父さん、呼んだ？

チャールズ うん。これから母さんとちよつと話をするつもりなんだが、おまえ、二階へ行つて、ジョンストンがちゃんと荷造りしてるか見てきてくれないか。必要なものは全部ベッドの上に出し
といた。

ジュディー オーライ。

チャールズ で、準備ができたらバッグを車まで運ぶように言ってくれ。

ジュディー 駅まで送ろうか？

チャールズ 有難う、でも、いいよ。運転手にやらせるから。ところで、パットがどこにいるか知ってるか？

ジュディー 自分の部屋。バタースコッチを舐めてふで寝してる。

チャールズ バタースコッチを舐めて不機嫌になるなら、舐めなきやいいじゃないか。

ジュディー 違う。バタースコッチを舐めて不機嫌になったんじゃなくって、むしろくしゃするから

バタースコッチを舐めてるんだよ。父さんに退屈な人間だつて言われたから。

チャールズ 別に非難したつもりはないんだがな。興味深い事実を一つ教えてやっただけのつもりなんだが。

ジュディー でも、父さんだつて、まさか喜ぶとは思わなかったでしょ？ あたしだつていい気はしなかったよ。あの後、考えちゃった。ねえ、父さん、あたし父さんの見方をちよつと変えるべきかなつて思ってるんだけど。

チャールズ そう？ どんな風に？

ジュディー ひよつとしたら父さんには、あたしたちには解らないような、とんでもないユーモアのセンスがあるんじゃないかなつて。

チャールズ また、どうして？

ジュディー 上手く言えないんだけど、でも何となく落ち着かないんだよね。つまり、……もし父さんがこれまでずっと陰であたしたちのこと嗤ってたとしたら、それって喜劇的じゃん。可笑しい。
チャールズ よく解らんね。

ジュディー つまり、最後の最後にあたしたちに一杯喰わせたつてこと。何だかとっても人間的。あたし父さんが好きになつちやつた。

チャールズ うーん。

ジュディー ねえ、驚いた？——あたしがこんなこと言うなんて。父さんはあたしのことほんとに解ってるわけじゃない。大体、父親って自分の娘のことは解らないんだよ。

チャールズ　そもそも人間は他の人間のことが解るのかな？

ジュデュー　愛しちゃった時は解ったような気がするんじゃない？

チャールズ　しかし実際は、それ以上の誤解はない。

ジュデュー　結婚した時、母さんのこと愛してた？

チャールズ　夢中だったね。

ジュデュー　永遠に続く愛ってないの？

チャールズ　ない。私にはそう思えるね。それが人生における最大の悲劇だ。真に悲劇と呼べるのは

それしかないのかもしれない。死？　死なら人間誰でも考える。しかし、人を愛した時、この愛

もいつかは終わるんだなんて考える人間はいない。そんなことを考えながら人を愛する人間はいない。が、どんな愛もいつかは終わる。だから人生がまやかに思える。

ジュデュー　なぜ永遠に続かないのかな？

チャールズ　習慣がそれを殺してしまうからさ。

ジュデュー　ダイアナとよく話すんだ、結婚するより愛人の方が良いんじゃないかって。

チャールズ　多分似たり寄ったりだよ。煩わしさは同じくらいあって、社会的な不便さは結婚以上だ。

ジュデュー　父さんが出てつちやうの残念。いろいろ訊きたいことあったのに。

チャールズ　何故もっと前に訊かなかったのかな？

ジュデュー　自分の父親には訊けないでしょ？　今こういうことを父さんと話せるのは、あたしがも

う父さんを父親と見てないから。親子って、お互いに退屈じゃん。自分がほんとに興味を持って

ることや、ほんとに大切なことは絶対話さない。

チャールズ　じゃあ、いつの日か再会した時は、その不幸な関係はお互い忘れることにしよう。おま

えは一人の若くて魅力的な女性、私は嘗ておまえの母さんと知合いだった一人の落ちぶれた紳士だ。

ジュデュー　話すことがすつごく沢山ありそうだね。

チャールズ　あるだろうな。……で、今さしあたり言っておきたいのは、私としてはその偶然的再会

がおまえとの新たな人間関係の始まりになることを願う、ということだ。おまえの顔を見るのは、これまでも大きな喜びだった。

ジュデュー　父さん、どうして行っちゃうの？　魂の救済とか何とか、そんなことのため？

チャールズ　それじゃアいかにも気取って聞こえるだろう。

ジュデュー　ねえ、お願い、教えて。駄目？　最後なんだし、他に誰もいないんだから。

チャールズ　そうだな。……私もこの先そう長くはない、それを無駄に過ごすことが勿体なく思えてきたんだ。おまえは一遍に沢山の手紙を書いたことはあるかな？　書かなくちゃならない手紙は山ほどある。しかし残された時間は十分しかないとする。そう想像してみてください。さて、何から書くだろう？　「魂の救済」だとか「永遠の生命」だとか、そうしたものから書くだろうか？

違うだろう。そんな大相なものじゃなくって、自分にとってその瞬間一番大切なものから書くんじゃないかな？　それしか書かないんじゃないか？　それは、デートの約束だとか、招待状への返事だとか、全く些細なものかもしれない。しかしおまえにはそれしか時間がないんだ。だから

他はどうとでもなれだ。ごみ箱に捨てるしかないだろう。それと同じで、もう私には今差し当たってやりたいことをやる時間しか残されていない、そう思えたんだ。

ジュディー そのやりたいことが何か、あたしには判んないけど、父さんならきつとできると思う。機会があるのにそれを掴まえないのは馬鹿だよ。あたし父さんを責めない。あたしだってきつと同じことするよ。

チャールズ ジュディー、おまえは良い子だ。

ジュディー 父さんはあたしにも機会を与えてくれたんだよ。あたし普通のレディーにはなりたくないと思ってたんだ。社交界にデビューして、パーティーに出て、結婚して、またパーティーに出る。そんなの嫌。あたし舞台に立ちたいの。

チャールズ 舞台というのがどんなものか解っているのかな？ ちょっと台詞を喋って、後はサヴォイで食事、——そんなのとは全然違うぞ。役者であるということは自分の時間の全てを芸に捧げるということだ。

ジュディー うん、解ってる。でも、やってみたいんだ。

チャールズ じゃア自分らしく自然体で行くさ。なんたってそれが一番大事だ。

ジュディー なら、そんなに難しくないんじゃない？

チャールズ それが違うんだな。自然に見えるということがどんなに難しいことか！ それは人工の限りを尽くして初めて達成できるものなんだ。それに、忘れちゃならないのは、世間は、役者は奇人変人だと考えてるってこと。一旦落ち目になれば、熱くて持っていられないジャガイモみた

いにさつさと捨てて顧みない。深酒ふかざけで駄目になった名優より、世間に殺された名優の方がよっぽど多い。役者にとって世間は素材に過ぎない。それ以上でもなければ、それ以下でもない。だから、いいかい、常に超然としてること。少なくとも精神的には、常にフットライトの向う側にあることだ。これが私が——永遠の別れを告げようとする父親が——愛らしい娘の、貝殻のような耳元に囁ささやいてあげられる、厳粛にして最後の言葉だ。

ジュディー どうして「永遠」なの？ あたしが有名になってギャラが沢山入るようになったら、で、その時父さんがすっかり落ちぶれてて、食うや食わずの生活してたら、喜んであたしの宮殿みたいなマンションに住まわせてあげる。

チャールズ 有難う、おまえは優しいな。さあ、母さんだ。とつと行つた、行つた。荷造りが終わら知らせてくれ。

ジュディー オーライ。じゃあ、父さん、がんばって。

チャールズ おまえもな。

ジュディーはドアからさつと出てゆく。同時にマージェリーがフランス窓から入ってくる。チャールズは彼女に近づくと、その手を取る。

まあ座って。

マージェリー 今日出ていくって本当？

チャールズ ああ。

マージェリー あなた、本気？ わたしを悲しみのどん底に落し入れようっていうの？

チャールズ マージェリー どうやら僕らは結婚して以来初めて真面目に話し合うことになりそうだが、お互い嘘は言わない方がいい。その方が話が進みやすい。

マージェリー でも、わたしはあなたを愛しているのよ。

チャールズ 違うね。それは嘘だ。もし今でも君の中に僕に対する本当の愛——あの渇きにもた愛があるなら、僕もこの家を出ていく決心はつかなかっただろう。

マージェリー これまであなた以外の人を愛したことはないわ。

チャールズ 多分そうだろう。しかしだからといって、今僕を愛しているとは言えない。

マージェリー どういうつもりで愛という言葉を使ってるのか分からない。

チャールズ 分かっているはずだと思うがね。君もかつて僕を愛した、僕が君を愛したのと同じように。あの時の気持を忘れることはありえない。

マージェリー でも、今のわたしが十九年前のわたしと同じであるはずないし、あなただってそんなこと期待しないでしょう？ わたしがあの頃と同じ、恋の病に罹った娘だったら馬鹿みたいじゃない。

チャールズ それにうんざりするだろうね。

マージェリー 愛がすべてじゃないわ。結婚したら、お互いへの信頼だとか、仲間意識だとか、そういったものの方が大切になってくるのよ。その意味でわたしはいつもあなたを愛してた。わたし

たちはなんて仕合せな夫婦なんだろうって、よく思った。ねえ、わたしたちこの十年口喧嘩さえしたことないのよ。

チャールズ しかし、そのことで不安になったことはないかな？ 意見が合わないことが一度もないなんて、そりゃお互いが心底無関心になっていいるからにちがいない、そう考えたことはないかな？

マージェリー どうしてそんな酷いことを。喧嘩一つせずにここまでやってこられたのは、わたしが一生涯懸命努力してきたからよ、そのことが分からないの？ 本当よ。決して生易しいことじゃなかった。だって、戦争から帰ってきたあなたは、それまでのあなたじゃなかったんですもの。

チャールズ 僕らは二人とも変わった。あるいは、何も変わらなかったが、五年間離れて暮らしたことで、初めてお互いの本当の姿が見えるようになったのかもしれない。

マージェリー 何が言いたいの分からない。わたしは戦争の間に色んな点で成長したわ。銃後を守るものとして、わたしは自分の義務を果たしたかった。そして立派に果たした。それは皆んな認めてくれると思う。そうする中で、人間として大きく成長したのよ。

チャールズ もとの君だと分らないくらいにね……。僕らは互いに謎の人間になっていた。もう一度一から相手を知るところから始めなければならなかった。そして二人とも、相手があまり好きじゃないことに気がついた。

マージェリー 戦争から帰ったあなたには、正直、がっかりしたわ、それは認める。よく憶えてるのは、ある時あなたが、バターの付いたパンを床に落としたのに、何もなかったように拾って食

べたこと。あの時は吐き気がしたわ。だけで有難いことに、わたしには想像力がある。わたしは自分に言い聞かせた、これは戦争のせいなんだ、大目に見てやらなくちゃいけないって。

チャールズ お互い愛していない人間と一緒に暮らすことは、とても難しいことだ。些細なことが可笑しくらい神経に障る。

マージェリー あれは些細なことじゃないわ。あれは、あなたの中に起こった変化を暗示してたのよ。あなたは美しい理想を全部なくしてしまっていた。違う？ 祖国を愛する気持さえなくしてしまっていたわ。お酒も度を過ぎすようになつて、言葉遣いも下品になつた。

チャールズ 神経が少し参つてたことは確かだな。そんな僕をよく我慢してくれたと思うよ。

マージェリー 我慢しなくちゃいけないって自分に言い聞かせてたの。休戦が成立して戦争は終わった、あなたにとつてはね。でも、わたしの戦争は続いてた、前と同じように。そう感じてた女性は何千何万といたと思う。わたしは良き妻、貞淑な妻であろうと努めてきた。だから今わたしには権利があるはずよ、——そのことを考えてほしい、もつと思ひ遣りを持つてほしいって頼む権利が。

チャールズ 多分僕らはお互いに対して、良き伴侶であろう、誠実であろうと努めすぎたんだ。君はオーストラリアのタスマニア人のことは勿論知ってるよね？ タスマニア人は決して不倫はしなかつた。だから死に絶えてしまつた。

マージェリー そんなこと知らないわよ。それにタスマニア人なんて興味ない。こんな時、よくそんな話ができるわね。

チャールズ 君に不快な思いをさせることは、申し訳なく思つてる。

マージェリー 不快な思い？ それだけ？

チャールズ そうだ。僕が家を出ていくことで君の虚栄心は傷つくだろう。が、君が僕の行く末を案ずることはほとんどないだろう。

マージェリー ああ、何度言ったら信じてもらえるの、わたしはあなたを愛してるのよ。

チャールズ 君が本当のことを言えば信じるがね。

マージェリー こんなに吃驚してゐる時に、何が本当で何が本当じゃないかなんて、分かると思つて？ 何もかもあんまりにも唐突で、あんまりにもショックだった。あなたは現在の生活に満足してるものだと思つてた。わたしたちの結婚は理想的なものだ、いつもそう思つてたわ。あなたは何が不満だったの？

チャールズ ヴィクトリア女王様のお言葉じゃないが、僕は愉しくなかつたんだ。

マージェリー 結婚に愉しさを求めるなんて、そんなことできないわよ。もし愉しいものなら、結婚を保護する法律や、教会の承認なんて必要ないじゃない。あなた、女は結婚を愉しいものだと思つてると思う？ 皆んな退屈で退屈でうんざりしてるわ。何千年も前からそうよ。わたしの知ってる奥さんの半分は旦那さんに飽き飽きしてて、顔を見ただけで叫び出したくなるって言つてるわ。

チャールズ じゃあ何故結婚にしがみついているんだろう。

マージェリー 皆んながそうしてるからよ。結婚ってそんなものなのよ。皆んなそれに慣れ切つてる。

それに結婚は女にとつて唯一見苦しくない生活の手段だったし、これからもきつとそうだから。それに、子供たちのため。自分が愉しくやりたいからつて、何の罪もない子供たちを貧乏のどん底に落とし込むなんて非道い。

チャールズ 君らには一万五千ポンドも残すんだよ。

マージェリー 元々あなたのお金じゃないくせに。

チャールズ 道徳的にはね。道徳的にはあの金は債権者のものだ。しかし法律上は何もできない。

マージェリー そんな汚れたお金じゃ幸せにはなれないわ。

チャールズ 持つてると落ち着かないつて言うんなら、債権者に返すのは君の勝手だ。しかし、率直に言うが、僕は僕の五千ポンドを手放す気は毛頭ないね。

マージェリー 裁判に訴えられても絶対大丈夫なの？

チャールズ 絶対大丈夫。

マージェリー もし自分のことだけ考えてればいいんなら、わたし躊躇わずにお返しする、——あなたの名譽のために。でも今一番に考えなくちゃならないのは子供たちのこと。あの子たちのために、わたしそのお金を取つておくことにします。

チャールズ そうこなくちや。それが分別つてもものさ。

マージェリー でも年七百五十ポンドで——しかも税金を引かれたらもつと少なくなるでしょ——それっぽちのお金でどうやつて暮らしていけばいいの？ 想像もできない。

チャールズ 結構幸せにやつていけると思うがね。

マージェリー 夫に逃げられた妻の立場つて、あまり気分の良いものじゃないわ。

チャールズ 友達には、亭主はノイローゼになつて外国へ静養に行つたと言つておけばいいさ。

マージェリー 世間の人たちがどんなか、解つてるでしょ？ いつだつて最悪のことを考えるのよ。

本当は逮捕状が出たんじゃないか、踊り子と駆け落ちしたんじゃないかって。でも責められないだつてそれが普通なんでもの。わたしも、そうであつてくれたらつて思うくらい。少なくともその方が自然だわ。それならわたしにだつて理解できる。

チャールズ 僕は死ぬまで君たちのために働くべきだ、それが神様が僕をこの世に遣わした理由だ、本当にそう思うのかい？ 生きていく上でどうしても必要なもののためじゃない、そんなものなかつて充分やつていける贅沢を君たちに与えるために働くべきだつて。

マージェリー 男なんだから当然でしょ？ 皆んなそう考へてるはずよ。

チャールズ じゃあ人生は？ 自分自身の人生が入る余地はどこにあるんだい？

マージェリー あなたが何を言いたいのか分からない。だつて、それが人生つてもものじゃない。妻や子が欲しがつてゐるものを与えてやる。それが一家の主の喜びだ、——普通の人ならそう考へるはずよ。

チャールズ で、それは生きるに値する、——そう思うんだね？

マージェリー もちろんよ。さもなかつたら結婚生活はみんな破綻してしまふわ。それに、働くつて決して辛いことばかりじゃない。いつまでも続く幸せをもたらしてくれるのは結局仕事だけなのよ。慈悲深い神様がわたしたちをこの世に遣わして良かったつて思つてくださるような、そんな

生き方の中で自分の義務を果たす——つまり自分の仕事を立派にやり遂げる、それって美しいことだわ。それに何て言っても大切なのは、美しいってこと。美しさって日々のありふれた生活の中にあるんじゃない？

チャールズ 株を売ったり買ったりすることの中には、残念ながら、あまりないね。

マージェリー あら、あるわよ。つまり、わたしが言いたいのは、何でも物事は精神的な観点から見なくちゃいけないってこと。わたしはいつもそうするように努めてきた。だからあなたがわたしのそうした面に入ってきてくれないことに、正直、がっかりしてた。チェコスロバキアの民芸品だとか、アルメニアのフォークソングだとか……。たった今ドロシーに言われたばかりなのよ、——このゴールドダズグリーンを実際美しいものにしたのはわたしだって。

チャールズ マージェリー、君は素晴らしい女性だよ。

マージェリー そんなことないけど、でも、わたしは馬鹿じゃない。それに、わたしのことを気取ってるって言う人もいないはずよ。多分こうしたことについては、わたしの方があなたより深く考えてきた。わたしは理想主義者なの。自己中心なことほど醜いことはないと思う。人は他の人のために生きることではか永遠の満足は得られない。つまり、チャールズ、あなたは自分のことは忘れて、パットやジュディーやわたしのために生きることではか本当の幸せは手に入れられないのよ。……こんなこと言っても無駄でしょうね。あなたは耳を貸さないと思う。どんなに素晴らしいことだって、初めから聞く耳を持たない人に聞かせることはできないもの。でも、いつか、わたしが正しかったって言ってくれると思う。男の人が充実した人生を送れるのは、自分を犠牲

にした時なのよ。持てるものの全てを、身近な人、愛する人のために与えたとき初めて人生の謎が解ける。人間ていう小^ちっぽけな存在、哀れな存在が美しいものに変わるのよ。

チャールズ マージェリー、君は掛替えのない女性だ。

ジュディーが入ってくる。

ジュディー 父さん、

マージェリー ジュディー、あっちへ行つてなさい。いまお父さんと話してるんだから。

ジュディー 荷造りが終わったって言いに来ただけ。父さん、今ジョンソンさんが荷物を車に入れてる。

チャールズ ありがとう。じゃあ、あとはさよならを言うだけだ。

マージェリー でも、今すぐ出ていくわけじゃないでしょう？

チャールズ 今すぐだ。

マージェリー でも、そんなこと、そんなことできないはずよ。わたしはまだ言いたいことの半分もいってないんだから。まだ始まったばかりだわ。とことん話し合うべきよ。

チャールズ なあ、マージ、僕は愛について、美について、仕事について、経済的状況について話し合った。これ以上何があるのかな？

マージェリー それじゃ自分勝手よ。つまり……、つまり……、あんまりにも唐突すぎる。わたし、

この状況に慣れる時間が充分にあったら、それなりに納得できたのかもしれないけど、でも……。
チャールズ マージ、僕のことは遠洋航路の船に偶然乗り合わせた人間だと考えるといい。船旅の間、僕らはよく顔を合わせた。しかし今、船は港に着いた。だから、二人はそれぞれ異なった道へ進んでいかなくはならない。

マージェリー ああ、そんなこと言わないで。船の譬えは嫌いな。哀れを誘うんですもの。泣きたくなっちゃう。

ジュデュー じゃあ、好きだけ泣けば？ 泣けば気が晴れるよ。

マージェリー 考える時間さえあったら、あなたを引き留められると思うんだけど。あんまりにも突然だったから、何をどう言ったらいいのか思いつかない。

チャールズ マージ、いくら考えたって、僕を引き留められるようなことは言えないと思うよ。何故って、君は本心で僕にいてほしいとは思っていないからだ。本当は心のどこかで新しい人生のことを考えて胸をときめかせているんだ。だから僕も後顧の憂いなくここを出ていける。

マージェリー 覆水盆に返らずってことね？

チャールズ じゃあ、さよなら、マージェリー。

彼はマージェリーの頬にキスをする。彼女はこれといった感情も込めず頬を差しだす、何年もしてきたように。

マージェリー 何だか変な感じ、あなたがこんな風に出てくなんて。ああ、何が何だか分からない。

ジュデュー ジョンストンさんの話だと、父さん燕尾服はいらないうって言ったそうだけど、一緒に入れておくように頼んどいた。

チャールズ どうして？ もう必要ないと思うよ。

ジュデュー そうとも限らないよ。ウェイターになりたいって思うかもしれないじゃん。

チャールズ そうか。おまえは賢いな。それは思いつかなかった。

マージェリー チャーリー、あなた、ウェイターなんて駄目よ。

チャールズ どうして？ 尾羽^{おは}打ち枯らしたら、どんな仕事だってやるさ。バーテンだって、煉瓦職人だって、ペンキ屋だって、船乗りだって。

マージェリー どうしてそんなことができて？ どんな人たちと付き合いなくちゃならないか考えて。

チャールズ 実を言うと、取分け行商に興味があるんだ。

マージェリー 行商？ チャーリー、そんな！ ……で、何を売って歩くの？

チャールズ ロマンズ。

マージェリー またそんな、夢みたいなことを！

ジュデュー けど愉しそう。

チャールズ さよなら、ジュデュー。

ジュデュー さよなら、父さん。がんばって。

チャールズはジュディーにキスをして、早足で部屋を出てゆく。

マージェリー ジュディー、母さん気分が勝れないの。

〔幕〕

訳者あとがき

先ず何よりも申し上げておきたいのは、翻訳に当たって、朱牟田夏雄・北川悌二両氏による注釈本『THE BREAD-WINNER』（北星堂書店 一九五六年）を大いに参考にさせていただいたことである。この本の NOTES は、正に学究の徒にしか出来ないであろうお仕事であって、モームの作品を原文で読みたいと願っている私には、これ以上の贈り物はなかった。この NOTES が存在しなければ、この作品を絶対に読み切れなかったであろうし、翻訳してみようという気にはならなかっただろう。衷心より感謝申し上げる次第である。

ただ、一つだけが疑問は残った。両氏は「はしがき」の中で、「その主人公 Charles Battle が齢四十を越えつつも自己の道に生きようとして、妻子、財産一切を擲って飄然として家を去ることが、この劇の主題になっている。これは *The Moon and Sixpence* で Charles Strickland が美の精に取り憑かれて家を出るくだりを顕微鏡にかけて拡大したものと考えることができる」と述べておられるが、果たしてそう言い切れるだろうか。

二人ともクリスチャンネームがチャールズであること、株式仲買人であること、妻が文化が大好きであることから推測できるように、モームがかなりの程度主人公の共通性を意識していたことは間違いない。しかし、二人の人物の造形は大きく異なっている。ストリックランドは、一言で言えば、monosyllable しか言葉を発しない男、己の行動を言葉では説明しない——できない——男である。対してチャールズ・バトルは自分の考えを筋道立てて説明できる人間であるし、ストリックランドの

ように「美の精に取り憑かれて」いるわけではなく、或る意味で私達と同じ普通の男である。The *Constant Wife* (一九二七)で妻が家を出てゆく理由を描いたモームは、その裏返しとして、The *Bread-winner* (一九三〇)で夫が家を出てゆく理由を描かずにいられたのだらう。(私にはこの二つの作品が対をなしているように思われてならない。)そして、喜劇と呼ぶのが躊躇われるこの苦しい喜劇にどうにか観客の興味を引きつけようと、彼自身最大の人気作『月と六ペンス』(一九一九)を利用したのではあるまいか。The *Bread-winner* のポスターに「あの『月と六ペンス』のチャールズ・ストリックランドは何故家を捨てたのか、今その真実が明かされる」とか何とか惹句を書けば、モームのファンは是非観てみたいと思うにちがいないからだ。「私は劇場支配人に損をさせるのは嫌だった」と『サミング・アップ』(四十二章)で述べているモームのことだから、まんざら考えられないことではないと思うのだが、如何だらう。

The *Constant Wife* と The *Bread-winner* とを並べて読んでみると、夫婦の片方が家を出る理由は The *Bread-winner* の方が遙かに切実であり、決定的だ。The *Constant Wife* の主人公コンスタンスはバーナードとの六週間のバカンスを楽しんだら、その後は夫のもとに帰ると言う。夫のジョンもそれを受け入れる。(そこがこの喜劇の喜劇たる所以でもある。)対して、The *Bread-winner* ではチャールズは永遠に家に帰らない。妻にも子供たちにもうんざりしたと言い切る。

二人の中年女性、マージェリーとドロシーに対するモームの筆は辛辣を極めていいる。Selina Hastings 女史は *The Secret Lives of Somerset Maugham* (二〇〇九)の中の *The Constant Wife* に触れた箇所で、「この作品に煮えたぎっているのは Syrie (一九一六年結婚、一九九年離婚)との結婚生活に伴

う不公平感、束縛感だ」(三二二頁)と述べているが、この評は *The Bread-winner* にこそ当てはまるのではあるまいか。作品としての出来はさておき、チャールズとマージェリーとの遣り取りは、モームと Syrie との結婚生活の空しさを反映しているようで興味深い。

四人の若者、パトリック、ジュディー、ダイアナ、ティモシーの軽薄さに対する筆もまた辛辣を極めていて(特に第一場)、観客は彼等の交す言葉に苦虫を噛み潰したことだらう。モームは『サミング・アップ』の中で、「商業演劇からは足を洗う、これからは書きたいものだけ書く」と述べた後、最後の四つの戯曲について「この四つの作品を、確実に不入りになってゆくであろう順番で発表することにした」(四十二章)と述べており、この作品が観客に与える不快感、不評は予測していたようである。(因みに *The Bread-winner* は最後から三つ目の作品で、初演の公演回数は百五十八。)

ただし、モームはジュディーにだけは希望を託していたと思う。第三場でのチャールズとジュディーとの遣り取りには、親子のほのぼのとした愛情が感じられ、この救いのない喜劇での唯一つの救いとなっている。(ついでに、舞台に立ちたいと言うジュディーにチャールズが与える助言には、演劇の世界に別れを告げようとするモームの、役者に対する苦言が冴していないだらうか。また、モームの作家としての信念——「世間は素材に過ぎない」「常に超然としていること」——が感じられないだらうか。)

翻訳に当たっては、例によって石川芳恵先生のお世話になった。また、日本モーム協会会員の池田博充氏には若者言葉についての貴重な御助言を頂いた。この場を借りてお礼申し上げます。